

「海外フィールド演習」における他者との出会いの効用 (2)

——インドネシアプログラムに参加した学生の経験から考える——

仲野誠*, 小泉元宏**

Outcomes of Encounters with Others in an Overseas Fieldwork Program:
A Case Study of an Academic Exchange Program between Tottori University and
University of Hamka in Indonesia (2)

NAKANO Makoto, KOIZUMI Motohiro

キーワード: 海外フィールド演習, インドネシア, ムハマディヤ・ハムカ大学, 経験, 気づき

Key words: Overseas fieldwork program, Indonesia, University of Muhammadiyah Prof. Dr. Hamka, experiences, awareness

1. はじめに

本稿は、2014年3月に実施された鳥取大学地域学部の専門科目「海外フィールド演習・インドネシアプログラム」を通して、他者と出会うということの効用について考えたい。同時に、本稿はそれを考える資料として提示されるものでもある。この科目は本学部で実施している複数の「海外フィールド演習」科目のなかのひとつである。これはインドネシアの他にも韓国、中国、ベトナム、アメリカなどの地域で実施されており(仲野ほか 2013)、日本学生支援機構(JASSO)留学生交流支援制度・短期派遣の「地域再生を担うインターリージョナルな協働人材育成プログラム」の一環でもある。

インドネシアプログラムは2013年3月に初めて実施された。初回はパイロットプログラムとしての実験的なものだったが、2回目から正規の専門科目のひとつとしての位置づけになった。

このプログラムは鳥取大学の学術交流協定校であるインドネシアの首都ジャカルタにあるムハマディヤ・ハムカ大学(University of Muhammadiyah Prof. Dr. Hamka, 以下「ハムカ大学」)(写真1)との協働によって開講されている。それは、鳥取大学と同大学の2013年9月に鳥取大学によって学術交流協定の締結が正式に承認されたことがきっかけである(仲野ほか 2013)。



写真1 ムハマディヤ・ハムカ大学(Bキャンパス)外観(2015年1月1日撮影)

(本稿の写真はすべて筆者〔仲野〕撮影)

*鳥取大学地域学部地域政策学科(執筆担当箇所:1.,2.,4.)

**鳥取大学地域学部地域文化学科(執筆担当箇所:3.)

本稿の目的は、2014年3月13日から24日にかけて実施された本プログラムを記録することである。そしてこのプログラムに参加した学生たちのレポートをとおして学生たちにとってのこのプログラムの意義や成果を明らかにし、それを踏まえてこれからの課題を述べたい。なお、巻末にはこのプログラムの振り返りとして書かれた参加学生たちのレポートを資料として掲載する。

このプログラムのフィールドであるインドネシアとハムカ大学の概要については仲野ほか(2013)を参照されたい。

2. プログラムの概要と学生の経験

2.1 プログラムの概要

このプログラムの一義的なねらいは「世界の広がりを実感しながら、その土地で暮らす人間の多様な生き方を知るという経験を仲間とともにすること」である。

そのなかでも特にこのプログラムで掲げた目標は「等身大のイスラームに出会う」ということだった。重要視したことはムスリムであるハムカ大学の学生とともに約10日間を過ごしなが、一般的な知識の水準(あるいは頭だけで理解する「よそよそしい」知識の水準)のみで思考することからはみ出し、イスラーム社会やムスリムの友人たちの生き方を自分の身体で経験し、メディアに流布するイメージではない「等身大のイスラームに出会う」ことだった。そしてその出会いを通して自分が生きている地域や自分の生き方を相対化する機会を得ることをプログラムの基本的な目的とした。ハムカ大学の学生・教員たちや訪問先のインドネシアの村の人々と出会い、彼/彼女らと寝食を共にし、インドネシアの日常生活を経験することによって、自らのこれからの生き方やこの社会の将来を真剣に考える/考え直すための有益な経験をすることが期待された。

また、このプログラムの学生募集をはじめたときから、「これは国際交流ではない」ということを参加希望者たちに明確に伝えた。もちろんこれは「日本の、あるいは鳥取大学の学生たちがインドネシアの学生たちに出会い、一緒に活動する」ことが主要な目的のプログラムである。その一方で、「国際交流」という言葉は往々にして私たちの思考が「国家」という枠組みの外にはみ出すことを許さない力をもっていることにも注意を向けた。後にこのプログラムで学生たちは実感することになるのだが、人間を区別したり、束ねたりする枠組みは国家だけではなく、世代、ジェンダー、階層、趣味、人種・民族など実に多様なものがあることや、それぞれの状況に応じて人間集団を切断/接合する境界線は不断に引きなおされ続けるということを理解するのも、このプログラムのもうひとつの重要な目的であった。

今回のプログラムへの鳥取大学からの参加学生は7名だった(表1)。その内訳は2年生が3名、3年生が3名、そして4年生が1名だった(学年は2014年度時点のもの)。学科別に見ると地域政策学科が1名、地域文化学科が6名で、地域教育学科および地域環境学科からの参加者はなかった。

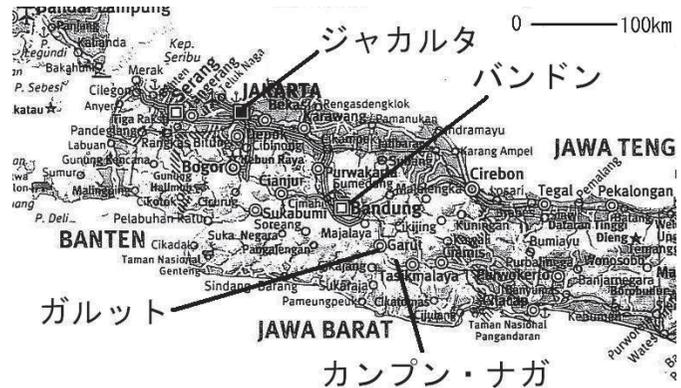


図1 インドネシア西ジャワ地方 (Periplus “Indonesia Wall Map” を加工)

性別においては全員女性だった。地域政策学科の仲野誠と地域文化学科の小泉元宏が引率教員として参加した。

ハムカ大学からは7名の学生が参加した(表2)。全員教育学部日本語教育学科の学生で、3年生が2名、4年生が5名だった。性別では女性が5名、男性が2名であった。この7名は鳥取大学の学生たちがホームステイするときと一緒にその家庭に泊り、学外でのフィールドワークに同行したコア・メンバーとしての学生の数である。ハムカ大学内で実施されたプログラムには日本語学科を中心とする大勢の学生たちが参加してくれた。

表1 鳥取大学からの参加学生

| | 所属 | 学年 | 性別 |
|---|------------|----|----|
| 1 | 地域学部地域文化学科 | 2 | 女性 |
| 2 | 地域学部地域文化学科 | 2 | 女性 |
| 3 | 地域学部地域文化学科 | 2 | 女性 |
| 4 | 地域学部地域文化学科 | 3 | 女性 |
| 5 | 地域学部地域文化学科 | 3 | 女性 |
| 6 | 地域学部地域文化学科 | 3 | 女性 |
| 7 | 地域学部地域政策学科 | 4 | 女性 |

表2 ハムカ大学からの参加学生

| | 所属 | 学年 | 性別 |
|---|-------------|----|----|
| 1 | 教育学部日本語教育学科 | 3 | 女性 |
| 2 | 教育学部日本語教育学科 | 3 | 女性 |
| 3 | 教育学部日本語教育学科 | 4 | 女性 |
| 4 | 教育学部日本語教育学科 | 4 | 女性 |
| 5 | 教育学部日本語教育学科 | 4 | 女性 |
| 6 | 教育学部日本語教育学科 | 4 | 男性 |
| 7 | 教育学部日本語教育学科 | 4 | 男性 |

2.2 プログラムの行程と学生の経験

本プログラムの行程は次の表3のとおりである。ここではその行程を記述するとともに、参加学生たちがその時々どのような経験をしたのかを本人たちのレポートを引用しながら概観していく。

表3 インドネシアプログラム行程

| 日付 | 活動内容 |
|---------------|---|
| 2014/03/13(木) | 12:45 鳥取空港発 (NH296) 13:55 羽田空港着 成田空港へ移動 (成田泊) |
| 3/14(金) | 10:00 成田空港発 (NH937) 15:40 ジャカルタ (スカルノ - ハッタ) 空港着 |
| 3/15(土) | ハムカ大学教育学部学部長の娘の結婚式に参列 |
| 3/16(日) | ジャカルタからカンブン・ナガ村へ移動し、同村で研修 |
| 3/17(月) | カンブン・ナガ村での研修 カンブン・ナガからガルットに移動、イスラーム宗教学校とコーラン教室を訪問 |
| 3/18(火) | ガルットでのエクスカージョン 夕方：ジャカルタに戻る |
| 3/19(水) | ハムカ大学での授業見学、ハムカ大学教員とのミーティング 両大学学生同士のワークショップ |
| 3/20(木) | セミナー「Social Change and Language (社会変動と言語)」(ハムカ大学) |
| 3/21(金) | ジャカルタ市内のエクスカージョン (独立宣言文起草博物館、イスティクラル・モスク、Kampung Bandan, Gandaria City ショッピングモールなど) |
| 3/22(土) | ムハマディヤ第5小学校訪問、ハムカ大学教員宅訪問 |

| | |
|---------|---|
| 3/23(日) | プログラムの反省会 21:30 ジャカルタ (スカルノ - ハッタ) 空港発 (NH938) |
| 3/24(月) | 06:50 成田空港着 10:45 羽田空港発 (NH295) 12:05 鳥取空港着 |

ではこの表3に記載されたプログラムを順に概観しよう。ただしプログラムの概観にとどまらず、学生たちのレポートに記された言葉を適宜引用しながら、その時々学生たちが受け止めたことやプログラムの現場に立ち上がった重要な問いを浮き彫りにしながら、このフィールドワークを振り返ってみたい。

3月13日～14日

3月13日の昼に鳥取空港を出発し羽田空港に到着した。引き続き成田空港付近のホテルに移動し、その日はそこに宿泊した。

翌14日に成田空港から直行便でジャカルタのスカルノ - ハッタ空港に飛んだ。ジャカルタの空港ではハムカ大学の教員と学生たちに出迎えられ、渋滞のなかジャカルタ市内へと移動した。その日のホテル近くの食堂で夕食をとりながらプログラムの打合せをした。その日は市内のホテルに宿泊した。

3月15日

15日の朝、ハムカ大学教育学部長の娘さんの結婚式に参列するためにホテルのロビーに集合した。この時はじめてこのプログラムと一緒に過ごすハムカ大学の学生たちと会った(写真2)。積極的に話しかけてくるハムカ大学の学生たちに対して、鳥取大学の学生たちは当初ややぎこちない対応だったが、そのような時間もつかの間、あっという間にお互いが知っている歌を歌いだし、打ち解け始めていた。この時の様子のある学生は次のように記している。



写真2 学生同士の出会いの様子(2014年3月15日撮影)

わたしたちは、インドネシアの学生たちと出会って一瞬で打ち解けた。インドネシアの人たちは見ず知らずの私たちを何の疑いもなく受け入れてくれた。数日後にはベストフレンドとなっているなんて、想像もつかなかった。……どこへ行っても、あらゆる人が両手を広げて私たちを歓迎し、もう家族である、親友である、と受け入れてくれるのだ。(2年)

これは、前述した「国際交流」という枠にとらわれずに現実をとらえるというこのプログラムの目的のひとつをプログラムの開始当初から学生たちが実感したことを示す記述ではないだろうか。最初はやや身構えていた学生たちが、共通の歌を歌うという素朴な行為によって、無意識のうちに国家や国籍という枠組みを軽々と一瞬にして飛び越えてしまったことを表している。

その後、結婚式に参列した。この式はインドネシアのスマトラ島のパダンという地域のしきたりにのっとり行われ、多民族社会インドネシアを身体で感じる大変貴重な機会となった(写真3)。そして、この結婚式での経験は単なる「異文化理解」という学びを大きく超えて、やや大きさに言えば「人との向き合い方」や「人間の優しさ」というようなより大きなテーマと直面することになる。たとえば、学生たちはこの時のことを次のように記している。



写真3 パダン式の結婚式(2014年3月15日撮影)

インドネシアの学生たちが持つ、あのパワーの渦は一体何なのだろう今思えば、インドネシアの学生と、仲良くなったタイミングを思い出せないくらい、いつの間にか打ち解けていたような気がする。……気が付いたら一緒に踊っている。気が付いたら一緒に歌を踊っている。10日間一緒に過ごして、表裏なくやさしく、素直な人たちなのだと感じた。それが私にとっては、あまりにもまぶしく、羨ましいものだった。私は日本にいるとき、人との距離感のとり方、関わり方がわからず、いつも苦心していたように思う。インドネシアにいる間は、どうして日本にいたころは、あんなに苦しんでいたのだろうか?と思うほど、みんながやさしく、温かかった。(3年)

結婚式に参加しているとき、暑いのが苦手な日本の仲間を見つけ、「Don't cry! Don't cry!」と寄り添い、歌を歌って励ましていた。その姿がまぶしくて、こちらが泣きそうになった。人をこうして励ますことって、頭でわかっているけど、なかなかできない。この子たちには私たちの持っていない、何か不思議なパワーがあるような、そんな気がした。インドネシアで出来た友達には、私たちと同じように……いつでも明るくて前向きなわけではなく、それぞれの悩みを抱えて、苦悩している。だけれども、私たちよりも、もっと素直にはしゃいで、笑って、人にやさしくすることが出来る。(3年)

ここにも狭義の「国際交流」を超え、世代や共通の趣味で一瞬にしてつながる学生たちの姿が見て取れる。しかしその一方で、同世代で共通の話題や趣味を共有しているかのように思えるインドネシア友人たちが「あまりにもまぶしく、羨まし」く、互いに似ているようで自分たちとは何か確実に違うことをも強烈に意識させられていく様子がうかがえる。

3月16日

3月16日はジャカルタを離れ、途中昼食を兼ねた休憩をはさみ、バスで6時間ほどかけてカンブン・ナガ(Kampung Naga)という村を訪れた(写真4)。この村は電気と水道がひかれていない村として知られており、ホームステイをしながら村の暮らしを見せてもらった。近代化された「便利な暮らし」に慣れた学生たちは、ここでも自分のあたりまえを問い直す機会を得ることとなる。

まず日本での生活様式とはさまざまな点で大きく異なるしくみをもつこの村で感じるのは、強烈

な違和である。

村では皆で共同のトイレ兼お風呂場を利用しているのだが、そこは四方を塀で囲われただけのもので、池の上につくられている。……いくら流しても、日本でのお風呂上がりのようにすっきりした感覚を持てなかった。……日本とは違う「あたりまえ」に触れたとき、私は、それに順応することを極めて困難に感じたのだった。(2年)



写真4 カンプン・ナガ村を歩く (2014年3月16日撮影)

緑が美しい田んぼを抜けると住居やモスク、集会所などが立ち並んでいて、鶏や猫があたりまえのように歩き回っている。特徴的なのがトイレとお風呂の様式で、コンクリート、もしくは木で四方を囲まれた小屋のようなものが大きな池の上いくつも建てられていてそこでお風呂もトイレも済みます。このお風呂兼トイレについて私は事前には知っていながらも、実際には戸惑った。タオルや着替えはどこに置けばいいのか、下の池には魚もいるがシャンプーを使ってもいいのか、どう考えても囲いの壁は低いが村の人たちは他の人に裸を見られても気にならないのかなど、お風呂だけでも疑問が絶えなかった。しかしそんな簡単なことにさえ戸惑い、悩んでいる自分がどこかおもしろかった。(3年)

そしてインドネシアの学生も同様の違和を感じていることを発見し、この違和感は自分が日本社会から来たから感じているわけでもないということに気づくことになる。

トイレは、四方を胸くらいの高さまで囲まれているが、屋根はない。去年訪れた学生から話は聞いていたため、覚悟はしていたが、実際にそこを使うとなると、なかなか勇気が必要だと思った。でもそれがここでの当たり前だけで、自分が住んでいるところと「当たり前」が違うだけなのだと納得した。どちらかという、インドネシアの学生の方が絶句していたかもしれない。女子学生の顔が少し強張っていたように思う。……当たりの前かが当たりにできない。竹とコンクリートでできた風呂場の壁に置いたピンクのプラスチックのシャンプーの容器物が、あまりにも不釣り合いで、その輪郭が際立って浮いて見えた。自分の当たり前と、このカンプン・ナガでの当たり前が全然違うことを象徴しているようだった。(3年)

このようなノイズは「(日本とは) あまりに違いすぎて、なかなか受け入れられな」い抵抗感を生じさせたが、そのようなノイズは、自分のこれまでのあり方を振り返り、そしてこれからの展望を考えるための貴重な糧にも転化する。たとえば学生のひとはこの村での経験を次のように記している。

わたしは、カンプン・ナガで予想もしていなかったような感情に襲われて、涙が止まらなくなった。電気もガスもない村で、幸せだと胸を張って、その人たちは暮らしていた。便利さを追求しすぎた日本の生活とは、まるで正反対だった。幸せとはお金や物や便利さではなく、人

の中にあるものだと確信した。……村を案内してもらっているとき、家と家が非常に近いことに気づいた。そこで、これだけ家同士が近かったら、近所間で問題は起きるのではないのか、と質問した。その答えによって、わたしは涙が止まらなくなった。「家と家が近かったら、例えば、塩がないとき、お隣さん、お向かいさんに塩ちょうだい、と声をかけることができるでしょう。そして争いは起きないように、どの家も電気やガスを持ちません」と言われた。正直衝撃だった。……その時に私には、その光景が鏡となって、自分の身の回りが見えた。競い合い、他人よりも優位に立つことが良いこと、というような社会の中では、このような問題がたくさんある。……だから、村全体が家族という意識で暮らしているカンブン・ナガの人々はとも羨ましかった。(2年)

また別の学生はこの村での経験を次のように振り返っている。

電気の通っている環境で生きてきている私たちには、電気が通っていないという事が不便なことのように思えたし、電気のある暮らしを知っているのなら、なぜ村を出て街で暮らそうと思わないのだろうか？と疑問におもった。そして、そのことを質問すると「家族のため」という答えが返ってきた。毎日頑張って働くのも、稼ぎに出るもの、村に戻ってくるのも「家族のため」。それを聞いた私は、日本での自分の家族との関係を考えずにはいられなかった。そして、それを考え出すと涙が止まらなくなった。(2年)

両親が毎日一生懸命の働いているのも、ご飯をつくってくれるのも諸々全てが「家族のため」なのだと改めて気付いた。それらの事は生活の中であたりまえのこととなっていて、見えにくくなってしまっていたのだと思う。そして、そうした愛情に対して、あるいは家族のために私はどれだけのことができただろうと深く考えた。……毎日の生活の中で当然のこととしてみなされてしまっていることは多くあるが、その裏には私たちに対する愛情が隠れていることが多いのかもしれない。そう考えると、私たちは気づいていないだけで、実は溢れんばかりの愛のある世界に生きているのかもしれないと思い、少し嬉しくなった。(2年)

この学生のみならず、多くの学生たちは一見不自由に思えるこの村の暮らしが鏡となって自分の日常を相対化させられることになった。それは近代的な暮らしの利便性への疑問という次元のみならず、地域における人間関係や「家族」や「幸せ」のありかたという、より根源的な問いを突きつけられることになったのである。

3月17日

翌3月17日の午前中はこの村のリーダーたちから村の概要に関するレクチャーを受け、ガルットという町に移動した。ここでは Pesantren (Pesantren) と呼ばれる寄宿舎制のイスラーム宗



写真5 宗教学校講堂での生徒たちとの対面
(2014年3月17日撮影)

教学校を訪問した(写真5,6)。イスラーム社会を理解するためには、近代学校教育とは異なるしくみをもつ宗教学校を訪れることも重要だろうと考えたためである。

学校に着き、まず学生たちは講堂で学校の先生と生徒たちに自己紹介をした。そしてその後、生徒たちと共に学校の食堂で昼食をとり、生徒たちと対話する時間をもった。ここでも学生たちは生徒たちから形にならない力あるいは大切な気づきを得ることになった。この経験について、学生のひとは次のように記す。

インドネシアの人々はとても優しくかった。

それは、なぜこんなにも優しくしてくれるのかと戸惑うほどだった。イスラームの宗教学校を訪れた際、自己紹介をする私たちに向かって生徒たちは大きな拍手をくれた。それだけでなく、名前を呼んでくれたり、「かわいい」「こんにちは」と声をかけてくれたり、部屋いっぱいに響くほどの反応をくれた。自己紹介が終わると一斉に生徒たちが集まってきて、「サリム」という年上の人の手の甲に自分の額をつけるあいさつをしてくれた。(3年)

その日の午後に宗教学校を出発し、ガルット郊外の村に到着した。その地域の子どもたち対象のコーラン教室を見学し、そのあとこの村にあるハムカ大学のある教員の実家にて、日本による植民地時代に子どもだった男性から当時の記憶を聴く機会を得た(写真7)。日本を責めず、それどころかその子孫である自分たちを家族として受け入れてくれるこの男性の語りに、学生たちはさまざまな感慨をもったようである。たとえば、学生による次のような感想が記されている。

過去の日本の過ちを責めることをせず、しかも感謝を伝えるお父さんの考えや、思いは私の想像も及ばない次元だった。なぜ自分の国を占拠していた日本に感謝の思いを口にでき、なぜ私たちを「家族」と呼べるのか。お父さんの寛大さに、強い葛藤を抱いた。(3年)

次の学生の記述からも同様の感想を読み取ることができるが、さらに踏み込んで、この時代を生きる自分にできることを模索し始めている。

「植民地をしていた日本人の子孫」としての私はとしてではなく、家族の一人として迎えてくれた。そのことに戸惑いを感じる一方で、包まれているような安心感があったことは確かであ



写真6 宗教学校の学生たちと談笑(2014年3月17日撮影)



写真7 ガルット郊外の村で男性から植民地時代の語りを聴く学生たち(2014年3月17日撮影)

る。過去のことも含めて私たちを迎い入れてくださったのである。お父さんの柔らかい笑顔を見て、目の前のお父さんにどのようなお返しができるのか、私はインドネシアとどのような関わりをもっていくことができるのか、ということ深く考えさせられたと同時に、今を生きる日本人としてどのような生き方ができるのか問われていると思った。受け入れてもらったからこそその責任感・覚悟が芽生えた。(4年)

これは、訪問者である自分が相手から何かを受け止めるだけではなく、自分は何を「お返し」できるのかということ問う、大変興味深い思考だと思う。

3月18日～19日

翌18日はガルツの中心市街地を散策したあと、午後4時頃にガルツを発った。そして21時にジャカルタに戻った。

19日の午前中はハムカ大学の授業を見学し、ハムカ大学の教員とミーティングを実施した。その日の午後は両大学の学生でワークショップを開催した(写真8)。これは相互理解を深めるためのワークショップであった。単なる一般的な「日本紹介」あるいは「インドネシア紹介」を相互にするのではなく、それぞれの学生がいま生きている現実を互いに伝えることを試みた。両大学の学生たちをそれぞれ3グループに分けて1グループにつき1テーマずつ、合計6テーマの報告がなされた。

それぞれの報告テーマは「表4」のとおりである。鳥取大学の学生から提示された話題は次のとおりであった。これらは、日常生活での「孤独」や友人関係の希薄さ、あるいは「居場所」づくりの困難に関するもの、私服や就活のスーツあるいは髪形に至るまで、もっと自由に自己表現したいのに他人の視線を意識して自由な表現がしづらいという現状について、そしてストリートライブなどの表現活動が日本のまちなかでは往々にして制限されてしまうという内容だった。一方、ハムカ大学学生の報告は、ゴミ拾いや大道芸人などの人々がつくりだすさまざまな仕事について、バス・乗り合いタクシーあるいは馬車など多様な乗り物について、そして町中にあるワルタッグ(warteg)と呼ばれる庶民向けの食堂についての報告だった。



写真8 学生たちによるワークショップの様子
(2014年3月19日撮影)

表4 ワークショップにおけるハムカ大学学生と鳥取大学学生の報告

| ハムカ大学学生の報告題目 | 鳥取大学学生の報告題目 |
|---------------|----------------------|
| インドネシアの珍しい仕事 | 日本人学生と「孤独」について |
| インドネシアの乗り物 | ファッションからみる日本人学生の自己表現 |
| インドネシアの食堂と食べ物 | 日本社会の規則や規制 |

興味深かったのは、鳥取大学の学生からの報告は、図らずもいずれもさまざまな制度に規制され

て不自由さや生きづらさを感じている自らの生き方を伝えるものとなったことだ。ハムカ大学からの報告はそれとは対照的に、制度から外れても自由に物事を創出していくインドネシア社会に生きる人びとの姿を描いていた。制度内で生きようとする自分たちの姿が、制度からはみ出しても別の生き方を作り出そうとするインドネシアの人たちの姿が鏡になって映し出されることとなったのは興味深いことであった。

3月20日

3月20日は終日セミナー“Social Change and Language”（社会変動と言語）を開催した。これは両大学の教員による研究報告をとおして双方の社会の今日的課題をとらえ、その視点の共有や意見交換を目的にしたものであった。

3月21日

3月21日はジャカルタ市内のエクスカージョンを実施した。訪れた場所は独立宣言文起草博物館（Museum Perumusan Naskah Proklamasi）（写真9）、東南アジア最大のモスクといわれるイスティクラル・モスク、都市スラムであるカンブン・バンドン（Kampung Bandan）地区（写真10）、そして近代的なガンダリア・シティ・ショッピングモール（Gandaria City）であった。独立宣言博物館では、現在のインドネシアを理解するためにはオランダや日本による植民地政策の理解が必要になることを実感することになっただろう。また極めて対照的である都市スラムのカンブン・バンドンと巨大な近代的ショッピングモールのガンダリア・シティを同じ日に訪問したことにより、インドネシア社会内部に存在する構造的な大きな格差が浮き彫りになったと思われる。



写真9 独立宣言文起草博物館にて説明を受ける
（2014年3月21日撮影）



写真10 カンブン・バンドンで子どもたちと遊ぶ
（2014年3月21日撮影）

3月22日

3月22日はハムカ大学と同じムハマディヤに属する、ジャカルタ市内のムハマディヤ第5小学校を訪問し、授業の様子や構内を見学した。その後、ジャカルタ市郊外にあるハムカ大学教員の自宅を訪問し、その地域の市場を見学したり、ハムカ大学の学生たちと教員宅で交流の機会をもった。

ある学生はハムカ大学の教員と共に訪れた市場で、鶏が捌かれる様子を見たいと思った。その理由は、日本では自分は既にカットされてパックに入れられた状態の鶏肉を購入するだけなので、「普段口にする鶏肉が、どのようにあのパックに入れられたかたちになっているのか、どのように命が奪われているのか、私にはそれを見る責任があると思った」からだという。しかし、実際は鶏が捌かれる様子を直視できなかった自分に驚く。その学生は次のように言う。

……見ようと思えば見れるのに、見てこなかったものがあまりにも多かったことに気が付いた。私たちは普段、目に見えないところでつくられ、準備されたものを食べて生きている。それから出たごみや、排せつされたものも、知らない誰かが、目に見えないところで後処理をしている。そういうものの上で、私たちは生きている。汚いものにふたをして、最低限のことだけで満足して、生きるのに必要な物を、狭くとらえて。それでも自分で料理をすることさえも怠って、生きようとしていたのが、情けなく思えてきた。私たちはどういうものの上に立って生きているのか。それも十分に知らずに、知ろうとせずに生きてきたことを反省した。「生きるために生きる」ことを私は選択出来ているのだろうか。(3年)

このようにインドネシアではごく日常的な出来事あるいは日々の断片的な出来事が、鳥取大学の学生たちにとっては自分のあたりまえを深く振り返るきっかけにつながっている。商品としての鶏肉を準備するという一見些細なことさえ、学生が「自分は日々をどう生きているのか」あるいは「自分の暮らしは何の上になり立っているのか」というような大きな問いにつながっていった。それは単に「自分が知らないことを知る」ということとは違う次元の問題であろう。「自分が気づけなかったことにすら気づけなかったこと」に気づく機会を得、反省し、これからの自分の生き方を考えようとするスタイルの学びであり、それに気づいてしまって格闘する学生の姿であるようにみえる。

3月23日～24日

23日はインドネシアにおけるプログラムの最終日であり、十分な時間をとってプログラム全体の振り返りを実施した。その日の夕方には空港に向かう必要があったために、より空港に近い教員の自宅でプログラムの振り返りが実施された(写真11)。

まず鳥取大学の学生同士、そしてハムカ大学の学生同士で振り返りをし、そのあと全体でそれぞれの意見を共有した。鳥取大学及びハムカ大学の教員からの評価や反省も述べられた。学生それぞれにとってのプログラムの意義は本稿の巻末のレポート集に記されている。

夕方にこの教員宅を出発し、スカルノ-ハッタ空港に向かった。教員宅と空港ではハムカ大学の学生たちに見送られ、別れを惜しんだ(写真12)。そしてその日の夜行便で翌24日の朝成田空港に到着し、羽田空港で飛行機を乗り換え、同日昼ごろに鳥取空港に着いた。



写真11 参加者全員でプログラムの振り返りを共有している様子(2014年3月23日撮影)



写真12 空港にて別れを惜しむ学生たち(2014年3月23日撮影)

以上、その日程に沿って、学生の言葉も引用しつつプログラムの概要をみてきた。次節では学生のレポートに表現された経験に言及しながら、このプログラムの意義と課題を整理する。

3. 「海外フィールド演習 インドネシアプログラム」の意義と課題

本節では、以下、このプログラムに関する意義と課題を指摘する。2014年度の本プログラムは、プログラム実施と前後して、学术交流協定締結などを含めた鳥取大学・ハムカ大学間の交流など、多岐にわたる活発な交流を伴ったものであった。それらを含めると、意義、課題ともに、さまざまな観点からの指摘、分析を加えられるだろう。しかしここでは、本プログラムが鳥取大学地域学部の授業科目として行われていることから、主に今年度の本プログラム参加学生によって記された事後レポート、ならびに本プログラムへの参加による観察を基にした質的な分析から、「本プログラム参加学生に対する教育効果」という観点を中心に、その意義と課題を挙げておきたい。

まず、今年度の本プログラムの意義の考察である。この点についても、意義をすべて網羅することは難しいため、特に事後レポートにおいて、参加学生の多くが触れている「他者との関係性」を捉え直す機会としての本プログラムの意義、そして、それが各々の学生の社会生活にもたらす意義という観点から考察を加えておきたい。というのは、第一に本プログラムの目的が前述の通り、「メディアに流布するイメージではない等身大のイスラームとの出会いを通して、自分が生きている地域や自分の生き方を相対化する機会を得ること」にあったためである。また学生の事後レポートの感想や考察内容も、一方で宗教や社会環境など多岐にわたる事柄について述べられているものの、ほぼ全てが本プログラムを経験したことによる「人々の関係性構築」に関する気づき、なかでも「自己」と「他者」の関係性構築に関する（再）発見に焦点化しているためでもある。学生のなかには、それら人々の関係性構築に関する気づきを、レポート全体の中心に据えて記述しているものも多い。たとえば、次のような各記述が挙げられる。

打ち解けるまでは、一瞬だった。インドネシアの人たちは見ず知らずの私たちが何の疑いもなく受け入れてくれた。数日後にはベストフレンドとなっているなんて、想像もつかなかった。ホームステイ先、カンブン・ナガ、お世話になったハムカ大学のみなさん、アユム先生のご家族など、どこへ行っても、あらゆる人が両手を広げて私たちが歓迎し、もう家族である、親友である、と受け入れてくれるのだ。(2年)

身構える間がなく、隠しことができない距離の近さがあるからこそ、私は「素」の自分でいれる、「ここ（インドネシア）では安心してのびのびと自分らしく振舞える」と確信した。(4年)

これらの記述に見られる、インドネシアでの経験を通じた他者との関係性構築に関する驚きや戸惑いは、参加した全ての学生に共通する点である。

興味深いのは、彼女らの多くが、「インドネシアで、いかに人々の関係性が近いものであり、それが自分にとって嬉しい経験であったのか」、もしくは、「インドネシアで、どれほど自身が受け入れてもらえる感覚を抱いたか」、といった内容の記述を残していることである。また、そのことの裏

返しとして、「日本の生活において、いかに他者との関係性構築が難しかったか」といった点についても記述している点にも特徴が見られる。たとえば、ある参加学生は次のように述べている。

このような人と人の近さは、ハムカの人たちにとってはごく自然なことだと思うが、私にとっては涙が出るほど嬉しいことであった。包み込まれているような安心感を与えてもらった。上で一度述べたが、日本で私は、人と関わる時、身構えてしまったり、過剰に気にしたりと、人とは一定の距離を保っていると思う。それは、一定の距離をとって相手に嫌われないように、自分が傷つかないように予防しているのである。(4年)

この学生の文章に見られる「このような人と人の近さは、……私にとっては涙が出るほど嬉しい」、「日本で私は、……人とは一定の距離を保っている」といった記述が示すように、日本では他者との関係性を構築するために心理的な障壁がある、と彼女たちが感じており、その反例としてインドネシアでの経験を捉える点は、驚くほど共通した感想であった。むしろ、このような感想は、海外フィールド演習という、非日常がゆえになされた部分もあるかもしれない。非日常のなかでの、時間的な関係性となるかもしれないインドネシアの人々だからこそ、自身の心情を普段よりも積極的にさらけ出すことができるという側面もあったはずだからである。また、本プログラムにおける学生の経験を代表させて、他のすべての学生に当てはめて論じることは難しい。しかしながら、帰国後、時間を置いたあとの反省会などの機会においても同様の趣旨の意見が多く上がったこと、また昨年度の本プログラム参加学生たちも同趣旨の感想を寄せていることから(仲野ほか 2014)、それらの声には、学生たちが日常生活について抱える心情についての、ある一定の傾向を読み取ることができるのではなかろうか。

すなわち、これらの事後レポート等には、現代日本社会の大学生の置かれている社会的ネットワークの希薄さ、とまでは言えなくとも、少なくとも鳥取大学地域学部 of 学生たちのあいだに、日常生活における社会的ネットワークの希薄さへの感覚が存在することが読み取れるのではないだろうか。また、そのようななかで、本プログラムをきっかけとしながら、日本での日常生活における社会的ネットワークの希薄さに対する問題意識を抱き、あるいは解決策の一端を学生が見つけるきっかけとなっている様子が読み取れるのではないだろうか。

豊島慎一郎(2011)は、地方都市における社会的ネットワークと社会参加について、地方都市においては、職縁・地縁による対人的なネットワークや、地域を基盤とする社会的連帯性が、社会参加プロセスを規定することを指摘している¹。しかしながら地方都市に生きる大学生は、これら職縁や地縁による対人的なネットワークが強いとは言い難く、ゆえに社会参加も希薄になる傾向にあることは想像に難くない。また現在、鳥取大学に在籍する学部生の多くは鳥取県外出身者であり(たとえば平成26年度の全学部入学者のうち、鳥取県外出身者が占める割合は約84%であった)、地域学部在学者においても一人暮らしの下宿生が多数を占める。ゆえに多くの学生が家族・親族等との血縁から離れる傾向にあることも、対人的なネットワークの希薄さを助長している可能性を指摘で

¹ 豊島は、大分県臼杵市を例としながら、この点を指摘している。鳥取大学地域学部が設置されている特例市にあたる鳥取市と、人口5万人未満程度の地方中小都市に当たる臼杵市を単純比較することはできないものの、鳥取大学地域学部が設置されている湖山地域は、千代川を隔てて市中心部から数キロ程度離れた地域であることから、地方中小都市における社会的ネットワークを参考とすることはできるだろう。

きるだろう。

さらに言えば、ここで重要なのは、彼女たちが実際に他者とどれほどの社会的ネットワークを築いているか、それだけが問題ではないということだ。阿部真大(2011: 12)が、「居場所とは、客観的な状況がどうなっているかではなく、本人がそこを居場所と感じているかどうかによってしか測ることのできない、極めて主観的なもの」であると指摘するように、実際に対人的なネットワークが限られているか否かとは別に、学生が「居場所がない」感覚、つまり社会生活における帰属意識の希薄さや、他者とのつながりの希薄さの感覚を実際に抱いている点に着目する必要がある。すなわち、彼女らの社会的ネットワークの希薄さは、実際に起こっている「事実」なのである。

加えて、これら他の対人的なネットワークの希薄さ(の感覚)ゆえに、日常を過ごす大学内での対人的なネットワークの構築は、彼ら・彼女らの限られた「社会」参加において、相対的に重要なものとなるのは明白だろう。たとえば、サークルや研究室などの仲間との対人的ネットワーク構築の重視がそれに当たる。だが、それらの関係性構築や、「社会」参加は、ときに固定的な人間関係に偏り、過度なものとなりうることもありうる。本プログラムに参加した学生の一人は、この点に関連して次のように指摘している。

日本は、親密な人間関係は限られており、家族や彼女・彼氏、親しい友人などとの関係が切れると一気に一人ぼっちになるイメージがある。それだけ一定の人に依存している傾向がある。(4年)

この学生が感じるという、「一定の人に依存している傾向」は、親密な人間関係以外の対人的なネットワークの希薄さ(の感覚)への自覚であり、ゆえに引き起こされる社会参加の機会の少なさによるものと考えることができる。さらに、付け加えるならば、人々の関係性構築に苦手意識を持ち、このような「一定の人に依存」している(という感覚)を持つことすら難しい学生たちにとっては、大学生活、さらにその後の社会参加がより困難なものとなりうることは容易に想像がつくことである。

このような「他者との関係性の希薄さ」(への感覚)は、学生の社会関係資本を貧しいものとするだけではなく、その希薄さへの感覚が過度に広がれば、他者との議論や対話を通じた学問の希求といった大学教育・研究の基盤の重要な部分をも阻害しうるだろう。ゆえに学生が抱く、そのような希薄さ、あるいはその感覚の打開への試みは、大学教育・研究にとっても重要であるはずだ。

では、どうしたら良いのだろうか。地域社会における社会的ネットワーク、という観点からすれば、本学・本学部が掲げる地域を基盤とした教育・研究は、地域社会における対人的なネットワーク形成を図ると共に、地域社会を基盤とする社会的連帯性を高めることに寄与することで、学生達の社会的ネットワークの強化、そして社会参加につながりうるだろう。地域調査実習や、研究室単位での地域社会との関わり、さらには課外活動などを通じた地域に生きる人々との関わりなどは、「地縁」の強化へと結びつく一歩となりうるということだ。

しかし一方で、本プログラムは、身近な地域社会とは別の社会的ネットワークの形成と、社会参

加への一步を踏み出す可能性となりうるのではないか、ということの本論は指摘しておきたい。すなわち、本プログラムを経ることによって、日常において各学生達が感じてきた「他者との関係性の希薄さ」(への感覚)を打破しうる、別の社会的ネットワークや社会的連帯への可能性があることに学生たちが気付くことができるのではないか、ということである。そのような萌芽は、学生の事後レポートの随所からうかがい知ることができる。

たとえば、ある学生は次のような体験をしたという。日本での生活に慣れたその学生は、風呂に入る際に、一般的にお湯が出ない環境であるインドネシアの水回りの環境に大きなショックを受けた。しかし、そのことをインドネシアの友達に打ち明けたところ、「ホームステイ先の人に頼んだらきっとお湯を出してくれるよ」とアドバイスをもらったという。その経験を振り返りながら、彼女は次のように述べる。

今までの私は、悩みは独り抱え込んで一人で解決しようとするような人間だった。言い方を換えれば、悩みや仕事はなるべく一人で、自分自身で解決すべきだと、無意識に自分自身のあたりまえをつくっていたのかもしれない。しかし、この経験により人に何か相談すること、それによって解決への道が簡単に開けるかもしれないことを身に染みて実感することができた。自然と、自分の中に作りこんできていたあたりまえを見直すことができたのだ。人の考えや意見を聞くことで、物事を以前とは違った側面から見たり考えたりできるようになるきっかけにもなったように思う。

さらに、彼女はこれらの経験を踏まえて、次のようにまとめている。

……インドネシアでできたかけがえのない友達とは連絡を取り続けていて、実際にそれができないのが悔しいところではあるのだが、明日にでもまた会えそうな気すらすることがある。(2年)

以上のような経験や感想は、異口同音に、複数の参加学生たちの事後レポートから見て取ることのできる点である。たとえば「国を越えて『ベストフレンド』だと言ってくれる人たちがいるのは本当に心強い。次インドネシアに行く時、帰れる家があることは本当に嬉しい」(3年)などといった感想はその一例である。他にも、次のような考察をしている学生もいる。

私は「他人に寄りかかる」「他人を信じる」ということが苦手であり、インドネシアに行ったからそれが改善されたというわけではない。しかしそういった「心の固さ」を実感し、認識できた事も小さいながら自分と他人との心の隔たりを解消していく一步となると思う。(2年)

重要なのは、彼女らが、新たな社会的ネットワークそのものを得られたか否か、という点だけではない。本プログラムを契機としながら、新しい社会的ネットワークが可能であるかもしれないことに気づき始めている点にあるのだ。仮に、それが非日常の海外フィールド演習だからこそ起こったことであったとしても、このような気づきはそれぞれの今後の社会的ネットワークの形成や、社会的連帯性、さらに社会参加のプロセスに大きな意味を持つだろう。そしてまた、これらの気づきは、身近な(しかし自身にとっての今の居場所ではない)と感じる社会的ネットワークを超えて、

別の社会的ネットワーク構築が可能であることへの気づきを介して、自らの他者との関係性への見方が「ほぐされた」とも見て取ることができる。

関連して、このような新たな枠組みでの対人関係構築の可能性への気づきは、結果として、学生たちに「国際」という枠組みが前提とする、国家単位の枠組みとは異なる、社会的ネットワークが存在しうることを知ることもつながっている。ある学生は次のように振り返る。

私は心のどこかで、「インドネシアの人々」はみな、電気がなくても困らない、外にある共同のトイレとお風呂にも戸惑わない、「自分とは違う人々」だと思っていた。そうであることを期待していたのかもしれない。……「国民性」や「国家イメージ」のようなステレオタイプは、海外から見たその国や国民への「理想」や「期待」のようなものと実感した。私が出会ったのは、確かに多くの「インドネシアの人々」だが、1人1人笑い方も話し方も私への接し方も全く異なっていたことは言うまでもない。私は自分が勝手に作り上げた「インドネシアの人々」という枠組みにインドネシアで出会った人々を当てはめて捉えようとしていた。(3年)

ここに示されているのは、相身互いの存在としての「インドネシアの人々」への気づきであり、ゆえに自明視してきた「国民性」や「国家イメージ」への疑いの意識である。そこには、国家の枠組みの中に還元されない、社会的ネットワーク形成の可能性への気づき、さらに自己をめぐる社会的制度への捉え直しにもつながる機会として本プログラムが機能していることも示唆されている。

最後に付記すると、本年度は、本プログラムに参加した学生のうち一名が、フィールドワーク先であったハムカ大学に日本語教師として就職するという出来事もあった。ハムカ大学では、日本語母語話者の教員が不足しており、語学力向上や、日本の生きた文化を知るために、彼女が果たすことができる役割は大きいだろう。それに加えて、彼女がハムカ大学に就職することによって、また新たな社会的ネットワークが形成されることもありうるはずだ。本プログラムを契機として、実際に新たな社会的ネットワークがなされ、新たな文化的・社会的活動の展開へと結びつきうる実例として注目しておきたい。

むろん、一方で本プログラムには、今後に向けた諸課題も存在する。同じく学生らの声で多く挙げられていた点からの考察を中心に、本プログラムの課題を整理しておきたい。

第一に、より幅広い視点からの「宗教」に関する教育の必要性である。本プログラムでは、実施にあたり、事前学習やハムカ大学で行う英語プレゼンテーションの事前準備等を実施した。その際に、イスラームに関する事前学習はある程度含まれてはいたものの、より包括的な「宗教」に関連する教育が必要とされるのではないか、ということである。この点は、本プログラムでの学習を超えて、他の国際交流プログラムにも共通する可能性がある点として述べておきたい。実際に参加した学生からも、その必要性を見て取ることができる。たとえば、ある学生の一人は、次のように指摘する。

イスラームやインドネシアのイスラームについてする前に、宗教という大枠で捉えたり、ざっ

くりとしたイスラームから入り体をならしてから、文献講読していくといいのかなと思った。
(4年)

ここに述べられているように、イスラームに関することを知る以前に、多くの学生が、そもそも「宗教とは何か」、「宗教とは、人々にとってどのような意味を持つ存在なのか」、といったことを幅広い視座から考える機会をほとんど持っていなかったことがうかがえた。しかしながら現在、本学部において行われている海外フィールド演習先や、大学関連の授業などで学生が渡航する先は、イスラーム教のほか、キリスト教（ローマ＝カトリック、プロテスタント）、仏教など、多岐の宗教圏にわたっている。そのような多様な宗教圏を前提としながら、（たとえば宗教におけるタブー行為などのみならず、宗教そのものが持つ精神性への理解も含めた）「宗教」の意味について包括的に考えるための教育がなされることは、昨今の国際交流に関するプログラムの増加に加え、海外渡航学生の増加や、留学生の受け入れ数増加等を鑑みても必要ではなからうか。この点は、個々のプログラム毎に取り組むのは難しいため、現在実施されている海外渡航に関する講習等において、より充実した取り組みが行われることを期待したい。

また第二に、本プログラムに限定した観点から述べると、先方とのスケジュール調整の難しさによって、昨年度に引き続き、タイトなスケジュールとなってしまふ点については、多くの参加学生たちが指摘するところであった。本プログラムに関して改善したほうが良いと思う点を指摘するなかで、ある学生が、「ホームステイ先でゆっくりする時間をつくること。体力的にもクタクタで帰ってきて、寝るだけ、のようではホームステイの意味もないし、家族に申し訳ない」（2年）といった声を上げていたことが示すように、個々のホームステイ先での交流の時間が確保しにくかったり、インドネシアでの経験を十分に振り返る時間が少なくなったりしてしまふことは反省点であろう。むろん、突発的なスケジュール変更や調整は、綿密な計画を立てても止むを得ず起こりうるかもしれない。しかしそれらを見越した余裕あるスケジュールの確保を十分に念頭に置くことは、双方の学生・教員の健康・安全管理の観点からも必要と思われる。今後、より改善していくことを心がけたい。

その他、「事前準備に関するスケジュール調整を早くから進めてほしい」といった意見、また、「参加学生の性別や学科が偏ってしまう傾向（昨年度と同様）」への対策、「プログラムに参加する全員が交流できるような時間が欲しい」と言った声などがそれぞれ挙げられていた。通常の授業科目との関係性や、学科を横断する告知の難しさ、限られたプログラムスケジュールのなかでの調整の難しさなど、解決のために連携や調整、工夫が必要とされる点はあるものの、今後、改善を模索すべき課題であると思われる。特に、参加学生の所属学科の多様化は、本プログラムの意義をより広くの学生たちが共有するためにも重要であろう。

とはいえ、前述した本プログラムを通じた「別の」社会的ネットワーク形成への気づきは、今後の学生の社会的ネットワークの形成や社会的連帯、さらに社会参加のプロセスに大きな意味を持つはずであり、その意義が重要であることに変わりはないはずだ。むろん、そのような意義がもたらされるのは、学生たちを快く受け入れる社会的連帯性の基盤が、相手方のハムカ大学に関わる人々の社会的ネットワークの中に存在していたからこそであることは論をまたない。今後もハムカ大学

と共同で諸課題を乗り越えながら、その意義が最大限生かされていくことを望みたい。

4. おわりに

以上、本プログラムの内容を記述し、その意義と課題を整理した。本稿の一義的な目的はこの作業である程度達成されたと思う。そしてこのプログラムを継続し、その実績がある程度蓄積されたら、その意義を総括的に分析しなければならないだろう。

個々の学生たちが経験した具体的なことやそれをもとに彼女たちが考えたことは、ぜひ巻末のレポート集を読んでいただきたい。そこにはそれぞれの学生の固有の思考や戸惑いが書かれてある一方で、この時代を生きる大学生に共通のジレンマや困難あるいは希望が記されているように思う。

そのレポート集から、学生の言葉をふたつ引用したい。次の言葉には、このプログラムの意義が集約されているようだ。このプログラムをとおして学生たちはインドネシアやムスリムに出会い、他者を知り、それによって世界を広げていくように思われる。しかし、実際に出会っているのは、出会いなおしているのは、インドネシアという鏡に映った自己かもしれない。

私はインドネシアで、何度も自分の知らない内なる自分に出会った。ムワッと湿気を持った熱気に包まれ、たくさんのバイクや車が溢れるジャカルタ空港に着いてから、穏やかな気候でどこか閑散としている鳥取空港に帰ってくるまでの間に、私は何度インドネシアと日本との文化の違いに驚き、葛藤し、感動しただろうか。その驚きや葛藤、感動のひとつひとつが、自分の知らない自分自身への気づきであった。そして同時に、自分が生きてきた社会、鳥取や日本、広くいえば先進国やアジアといった世界について考えるきっかけともなった。(3年)

また、このプログラムへの参加をきっかけにハムカ大学で働くことになった者がいることは既に述べたとおりであるが、この参加者の言葉からはこれからの希望や可能性を読み取ることができる。

私はハムカで働くことに迷いはなかった。……無数のたしかに近い関係・つながりを感じたからこそ、家族や日本人の知人がいるわけではないインドネシアで働くことも決意できた。また、悪い状況であっても笑い飛ばすことができる頼もしい人びとがたくさんいるから、私も大丈夫だって信じていることができる。そして、自分らしく振舞える場所がインドネシアにはあり、同じく自分らしく素直に生きているベストフレンドがいるから、彼らともっと過ごしたいと思った。

今回のプログラムで経験したことや、これから経験していくことを、自分のなかにどう織り込み、そしてインドネシアの人びとになにをどのように返していけるのか模索しながらインドネシアでの生活を頑張りたいと思う。(4年)

上の言葉で表現されていることは、おそらくインドネシアで働くというきわめて稀な機会を得た者だからこそその言葉ではないだろう。むしろ、インドネシアで出会った人びとの力を自分の中に織り込んで自らの力に転換しようとするこの意思は、他の参加者も同様に獲得したものだと考えるべきではないだろうか。そしてさらには、ここに描かれているのは他者との出会いを通じて自分自身に常に出会いなおし、自分の新たな可能性を発見あるいは想像／創造し続けようとする私たち自身の姿でもあるように思える。

参考文献

阿部真大, 2011, 『居場所の社会学—生きづらさを超えて』 日本経済新聞出版社.

外務省「各国・地域情勢 インドネシア」<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/indonesia/data.html#04> (2015年1月30日ダウンロード)

鳥取大学入学センター『2015年度 鳥取大学大学案内』

豊島慎一郎, 2011, 「地方都市における社会的ネットワークと社会参加—大分県臼杵市データを用いて」『教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集』5(1).

仲野誠・小泉元宏・アクバル・ナドジャル・ヘンドラ・ハリ・ナレディ・デスビアン・バンドルシャ, 2013, 「『海外フィールド演習』における他者との出会いの効用—インドネシアプログラムを事例として」『地域学論集』10(2): 1-44.

水本達也, 2006, 『インドネシア——多民族国家という宿命』 中央公論新社.

Burhani, Ahmad Najib, 2013, “Liberal and Conservative Discourses in the Muhammadiyah: The Struggle for the Face of Reformist Islam in Indonesia,” Martin Van Bruinessen ed., *Contemporary Developments in Indonesian Islam*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 105-144.

資料

「2013年度 海外フィールド演習インドネシアプログラム」に参加した鳥取大学 地域学部学生のレポート

本稿の資料として、このプログラムに参加した鳥取大学地域学部の7名の学生たちが帰国後の2014年4月に提出したレポートを掲載する。

インドネシアから学ぶ 地域学部2年生

1. はじめに

インドネシアで過ごしたのはたったの10日間だったが、すごく刺激的で濃い時間だった。その短い時間の中で、様々なことに気づき、何度も自分と向き合うこととなった。いかに日本で生活する中で、毎日をやり過ぎて生きていたのかと気づかされた。

日本に帰ってきて思ったことは、人とのつながりを意識しながら生きていたい、ということだ。インドネシアの人々の魅力やパワーに触れて、日本での生活を振り返った時、繋がりの薄さやさみしさ、ある一定の強いつながりに依存しすぎることを感じた。そして、わたしが抱えるさみしさ(大きくとらえれば、日本全体が抱えるさみしさとも言える)は、このつながりの薄さが原因なのではないか、と考えるようになった。

そこで、この報告書では、私が感じたインドネシアの人々の魅力について語り、その魅力から学ぶことを考えることとする。

2. インドネシアの人々の魅力

私はインドネシアで出会った人の魅力に取りつかれている。日本にいるときより楽しそう、と言われて、自分が自然と笑顔になっていることに気づいた。自然とインドネシア人々の笑顔のパワーに巻き込まれていたのだと思う。彼、彼女らは自分の今日を、みんなで思いっきり楽しんでいた。

ここでは特に印象に残った具体的なエピソード、2つを交えて、その魅力を探る。

2.1 エピソード1

わたしたちは、インドネシアの学生たちと出会って一瞬で打ち解けた。インドネシアの人たちは見ず知らずの私たちを何の疑いもなく受け入れてくれた。数日後にはベストフレンドとなっているなんて、想像もつかなかった。ホームステイ先、カンブン・ナガ、お世話になったハムカ大学のみなさん、アイム先生のご家族など、どこへ行っても、あらゆる人が両手を広げて私たちを歓迎し、もう家族である、親友である、と受け入れてくれるのだ。

それはなぜだろうか。その疑問について私が思ったことは、みんな、人と人の境界線が曖昧で、そこにいる人たちの心は、体よりももっと近くにある、ということだ。体自体も日本に比べたら、他人と密接で近い。個という意識よりも、明らかに共同体としての意識が強い。人を受け入れるということに、何の疑いも抱かないのではないか。それは、人と人が少しずつ溶け合っているような

印象を受けた。

ではなぜ、人が溶け合って生きていること、それが当たり前なのかと次々に疑問の連鎖になるが、疑問を持ってたどり着く先はやはり、イスラームのお祈り、信じる心なのではないかな、と10日間過ごしていくうちに思うようになった。お祈りするときには、より多くの人たちで共有してお祈りをしていた。そのような日ごろの行いや、心から、インドネシアの人々の関係は、他人はもはや他人ではないような社会の成り立ち方をしていた。その他人を受け入れる心の広さや、柔軟さ、温かさは、とても魅力的だった。

2.2 エピソード2

わたしは、カンブン・ナガで予想もしていなかったような感情に襲われて、涙が止まらなくなった。電気もガスもない村で、幸せだと胸を張って、そこの人たちは暮らしていた。便利さを追求しすぎた日本の生活とは、まるで正反対だった。幸せとはお金や物や便利さではなく、人の中にあるものだと確信した。それでもなぜ、知ってしまった便利さからは離れられないし、すでに充分すぎるのに、物質的な豊かさを追求しているのだろうか。そんな日本のことを考えながら、村を案内してもらっているとき、家と家が非常に近いことに気づいた。そこで、これだけ家同士が近かったら、近所間で問題は起きるのではないのか、と質問した。その答えによって、わたしは涙が止まらなくなった。「家と家が近かったら、例えば、塩がないとき、お隣さん、お向かいさんに塩ちょうだい、と声をかけることができるでしょう。そして争いは起きないように、どの家も電気やガスを持ちません。」と言われた。正直衝撃だった。家同士が近いことが、争いにつながるどころか、家と家が近いことで助け合える、という考えがカンブン・ナガにはあったのだ。その時に私には、その光景が鏡となって、自分の身の回りが見えた。競い合い、他人よりも優位に立つことが良いこと、というような社会の中では、このような問題がたくさんある。どうしてもカンブン・ナガの人たちのように、他人を思って気遣いあいながら、暮らしていくことは不可能なのであろうか。もしそうだとしたら、とても悲しい。近所という狭い社会の中でさえ、ある意味、人間の優劣のような構造ができてしまっていることが苦しかった。だから、村全体が家族という意識で暮らしているカンブン・ナガの人々はとても羨ましかった。

3. インドネシアが抱える問題

前では、インドネシアの人々の魅力について述べてきたが、決して良い面だけを見たわけではない。

2.2で、便利さを追求しすぎた日本、と述べたが、ジャカルタも同じように立ち並ぶビルから近代化の波が目に見えた。また、学生たちは度々、日本のようになることがいいことだ、というような発言をしていた。先進国のようになるんだ、といったような国全体の流れや意識が、インドネシアの人々のパワーになっている部分も少なからずはあるのかな、と感じた。

しかしわたしは、自分たちの生きる力を失わないことのほうがよほど、大切なことであり、難しいことである、ということを伝えたかった。これは、決して上から目線でもなんでもなく、ただ単純に、私が日本人であるから感じたことである。

そして、カンブン・バンドン出発前には、ハムカ大学の学生が、貧乏村と言っていたり、村の障害をもったように見える人を、数人で囲んでからかうような光景を見たりして、インドネシアも抱える格差や人権の問題も目の当たりにした。

4. インドネシアから学ぶ

誰かと一緒になって心底笑うことは、体力も必要だなあ、と思ったが、そのパワーはとても力強く、過ごした時間は最高に幸せな時間だった。しかし、これをただ良い経験、思い出で終わらせてしまっただけではない。

ここで、インドネシアの人々を魅力的だと感じた理由を考えてみると、日本で生きる私たちが持っている人間の力を、インドネシアで出会った人々は見せてくれていたのではないか、と思った。この力は、どこから湧いてくるものだろうか。私がとりつかれている魅力の理由を聞いてみても、きっと納得のいく答えは得られないだろう。それは、インドネシアの人々にとって当たり前のことであるからだ。お祈りをするのもそうだ。それは私たちが朝起きて、歯磨きをするように、当たり前前に、神と真剣に向き合うことをしているようにも見えた。

例えば今、日本の抱える問題の要因には、個が成立しすぎていること、他人を信用しないこと、常に他人よりも優位に立とうと思うこと、豊かさの価値を物質的なものやお金に置くことなど様々ある。そして悲しいことに、これが日本の当たり前であり、当たり前を変えることは難しい。だからと言って、くよくよしたくはない。それぞれの人が誰かと少しずつ意識を共有しながら、今日を楽しく、より面白く過ごすことは、その人の意識次第で可能だと思うのだ。

私はインドネシアに行って、つながりを意識して生きていたいと思ったし、それが優しくあたたかいつながりであってほしいと切実に思う。日本全体を変える力などないし、私には、行く前よりも、分からないことも、つらいことも、考えさせられることも増えたと思う。しかしそれはインドネシアで感じ取ったことで自分と向き合っている証拠である。また遠く離れた地にベストフレンドがいるという大きな強みがある。だから、自分の周りからでも、優しくあたたかいつながりを築いていき、そのつながりがまたゆるくつながっていけばいいと思っている。

「戸惑い、気づき、喜ぶ」 こうして私は成長する ——私たちは同じであった——

地域学部2年生

はじめに

今回のプログラムを自身の一言で表すなら「気づきの旅」だろうか。インドネシアでは日本での暮らしでは見えづらく通り過ぎていたようなこと、自分から見ないように遮断してしまっていたことにも目を向けることができたように思う。しかし、プログラムではうれしい気づきばかりではなく、戸惑いも、苦しさも経験した。今では、本当に貴重な体験ができたという喜びと、あの時もっと自分の周囲の環境や人と向き合っていればよかったという後悔の両方を感じている。このレポートでは、インドネシアプログラムに参加して印象深かった気づきや心に残っていることをかき集め、文章化し、もう一度インドネシアでの経験についての振り返りを行いたい。

1. 私を安心させてくれる人々

1.1 不安と出会い

インドネシアプログラム参加者を乗せた飛行機が日本の成田空港を離陸してからおよそ7時間後、私たちはインドネシアのまわりつくような湿度と熱気に包まれていた。いくらか心構えはあった

つもりなのだが、やはり見慣れない人々に囲まれ、言葉も通じない世界に来たのだと理解すると、途端に不安や警戒といった気持ちが浮かび上がった。私にとってはこのプログラムが初の海外渡航であり、金銭や貴重品の管理や海外での振る舞いについての知識が乏しかったことや、空港の両替所で参加者がお金をごまかされそうになったという事件が相まって、10日間という短いようで長い海外生活への不安と戸惑いが膨らんでいた。そんな中空港には数名のハムカ大学の教員と学生が出迎えに来てくださっていた。彼らとは全くの初対面であり、人柄どころか果たして誰が教員で誰が学生なのかさえもよく分かっていなかったのだが、朗らかな笑顔と想像していたよりもずっと流暢な日本語を操る姿を見て、過度に不安がることもないのかもしれないと安心した記憶がある。その後私たちはハムカ大学が用意してくれたバスに乗り込み、大学がある地域へと移動した。途中、みんなで夕飯を食べたのだが、誰と話せばいいのか、何を話せばいいのか、目の前にある果物らしきものは一体何なのか、見慣れない環境に取り囲まれた私たち学生はそれぞれが戸惑い、怖々と未知のものに対し接触を図っていた。

1.2 暖かな気遣いに触れる

1日目に宿泊したホテルでは、水道や空調、wifiといった設備が完備されていた。しかし、それ以前に空港や夕飯を食べた料理店でトイレを利用した際に日本とは全く異なる様式を目の当たりにし、ショックを受けていた。そういった設備に対する不安もあったが、インドネシアで10日間を過ごすにあたっての一番の心配は、何と言っても暑さであった。私は暑さや日光が苦手なため、プログラム中体調を崩してしまうのではと渡航前から予想はしていたのだが、プログラム2日目にして早くもその通りになってしまった。

2日目はハムカ大学のある学部長先生の娘さんの結婚式に参加させていただいた。伝統的な衣裳や飾り付けが美しい、とても豪華な式だった。参加者もたくさんおり、会場内が熱気に満ちており、その日はわりと気温も高かったので式が始まってすぐ気分が悪くなってしまった、ついには耐え切れず、泣き出してしまったほどだった。

その後体調は落ち着き、式場の隅で座って安静にしていたのだが、ハムカ大学の学生が私の所に来てしきりに心配をしてくれた。私が飲み物を持っていないことを知ると、買ってこようとまで言ってくれた。式場には売店や自動販売機は無く、炎天下の中、式場から少し離れた路上で出ている屋台、それもよく冷えた飲み物を売っているところをわざわざ探し、買ってくれた。彼女らの親切、思いやりは身に染みて嬉しかった。また、学生だけでなく、教員の方や大学のOBの方も大変気にかけてくださった。彼らの優しさはこの時だけのことではない。教員、学生を問わず、朝、顔を合わせたときや外で活動を行っているときなど、プログラムを通して「大丈夫?」「熱くない?」「元氣?」といったふうに何度も何度も声をかけてくれた。

1.3 真心のこもった優しさ

イスラームには「喜捨」や「弱者に対する救済」といった道徳観があり、ムスリムの人々はそれを行う、または行われることを当たり前だと思っている。渡航前、日本での事前学習でこういった習慣について学んだ際は、お金をあげたりするのだろうかくらいにしか想像できなかったが、今回私が受けた彼らの優しさも、「困っている人は助けるのがあたりまえ」という彼らの習慣から自然と行われたことなのだ。「習慣」という言葉を使うと、どこことなくそっけない印象を受けるかもしれないが、決してそのようなことはない。彼らの優しさには真心がこもっていると私は感じた。

2. 自分自身を見つめなおす

2.1 珍しさへの興奮と自分に対する戸惑い

3日目は電気を村に引かずに生活をしている「カンブン・ナガ」という集落を訪れた。このプログラムの一期生の方からこの村の話は聞いていたけれど、実際に目にしてみると本当にすごい。最も驚いたのは何とんでも水回りの設備である。池の上にトイレやシャワー室が設置され、山から引いてきた水をそのまま利用する。しかもその池には魚が泳いでおり、人間の排せつ物を餌として食べ、成長した魚を人間が食べるという循環ができています。このような、これまで私が暮らしてきた場所にはない生活様式に触れ、私はすっかり浮れてしまい、観光旅行で村を訪れているような気分になっていた。そこで生きる人々と向き合い、何かを得ようとするのではなく、ただ珍しい暮らしを体験しているような感覚であった。その後、これではただ楽しんでいるだけではないかと反省したものの、村の人たちの理念や村人同士のつきあい方といった、本当に知るべきことにほとんど目が向いていなかったのは残念というほかない。村のモスクでお祈りをさせてもらい、集会所に集まって村の歴史を聞き、むらあるきを行ったのだが、そこで頭に入ってくるのは単純な「知識」であり、心を震わすような衝撃ではなかった。ただ楽しんでいるだけはいけないと思いつつも、見えるものを感じる事がどうにも心に響かず、自分はどうしてしまったんだという焦燥を感じていた。後に鳥大生と引率教員との振り返りを行った際に分かったことだが、こういった悩みは程度の差は違っても、みんなが感じていたことだったようである。

2.2 「まなざし」の力

「何かにつかつかからなければいけないのではないか。」このことは私にとってとても大きなプレッシャーであった。必死に周囲を見渡すが、なぜか心に響かない。今まで知らなかった風景や人々、彼らの生き様、考え方など私にとって「あたりまえでない」ものがたくさんあるにも関わらず、それらに深く踏み込めない。なぜこのようなことが起こったのか、それは私がいつの間にか作り上げていたインドネシアに対する「まなざし」が大きく作用していた。

私は昨年の内からプログラム一期生や仲野先生からインドネシアでの出来事やそこで暮らす人々の人柄、イスラームの精神について話を聞き、写真や映像を見ていた。そういった伝聞の知識が積み重なり、行ったことのない土地や会ったことのない人々に対してのイメージを作っていたのだと思う。そして私が行っていたのはそのイメージと実際に見たことを比較するだけの確認作業だったのである。今回のプログラムは予備知識をある程度持っていなければ疑問を疑問として捉えられず、ある物事が起こる背景に目が向かない可能性がある。しかし、知識を持ちすぎることによって、その知識から自分が作り上げた「まなざし」に期待しすぎてしまい、本当に感じるべきことを通り過ぎてしまうことも起こりうる。私は無意識のうちに「インドネシアは、そこで暮らす人々はこのようなである」という「まなざし」をそのまま当てはめようとしてしまっていた。私がおそらくそのような偏った見方をしていると気づいたのはインドネシア6日目にハムカ大学で行われた学生間のワークショップでのことだった。

2.3 戸惑いから課題へ

ワークショップでは2、3人が1組となって、自国に関するプレゼンテーションを行った。鳥大側は日本社会の問題点に焦点を当て、ハムカ大側はインドネシアで見られる交通機関（アンゴットと

呼ばれるミニバスやバジャイと呼ばれる二人のタクシー) や料理店 (ワルタッグと呼ばれる大衆食堂), ユニークな仕事 (ゴミを集める人や音楽家, サル仮面) の紹介を行った。彼らの発表内容は私にとって非常に新鮮なものであった。発表で取り上げられたものの中には, 私がいつも大学に向かう車の中で「あれは何だろう」と疑問に思っていた乗り物や人々の紹介もあった。この発表を聞いて初めて彼らの生活が、「なんとなく遠くにある不思議なもの」から「今, 自分の目の前にある現実」として捉えられるようになった。このことから, 何かを見ようとするとき, その対象が直に自分と関わっていると認識しなければ一歩踏み込んでそれらと向かい合うことはできないのだと感じた。

今, 日本に戻り, このレポートを書いているが, なんとなく自分が宙ぶらりんな体勢で揺れているような感覚が常にある。それは自分が生きている社会——政治情勢や暮らしの土台である地域の事, 自分の将来など——に対して, 直に関わっている感覚がないからだろう。そう考えると, 今という時間, 私という生をないがしろに扱ってしまっているのではという気分になる。私がインドネシアで出会った人々は, 経済的には豊かでなくとも, 人間的な豊かさを持ち, 自分が生きるための道にしっかりと足を着けて強かに生きていた。一方, 私のこれまでに暮らしを振り返ると「清潔」な環境で暮らし, 「飢える」ことは無かったけれど, つながり合う, 支え合うという本当に力強い人と人との結びつきはほとんど見当たらない。私の両親が必死に働きながら, 私や, 私の姉妹を健やかに育ててくれたことを思うと, 自分の人生が不幸なものだとは全く思わないし, むしろ今の自分があることを喜ばしく思う。しかし, 人間的な豊かさ, 結びつきを持った彼らの生き様を羨ましくも思う。私は日本人であり, 彼らはインドネシア人である。人種や国籍が異なれば, 私はインドネシアで生きる人々のように人間的な豊かさを感じられないのだろうか。私は一応仏教徒であり, 彼らはムスリムである。信仰する宗教が違えば, 私は人と人との間に生まれる力強い結びつきを得ることはできないのだろうか。果たしてそうなのだろうか。これは私がインドネシアで数えきれないほどの貴重な経験をし, それらを整理して見つけたこれからの課題である。私は国籍や人種, 宗教といった枠組みが人間を完全に分かちあうことはできないと思う。しかし今の自分にはそのことを自信を持って説明できる根拠も考えもない。このことに対して自信を持って「これだ」と思える答えをこれから先探していこうと思う。

3. 私たちは何者なのか

3.1 1人であることで感じる孤独

日本で生活する中で, 私は1人で行動することが多かった。大学でも友人と時間が合えば話をし, 食事をする。しかしそうでない場合は, 誰かとわざわざ約束を取り付けて時間を共有することはなく, そこまでするのは面倒だとさえ思っていた。しかしインドネシアで生活をして, 自分は本当は一人が寂しいと感じているのだということに気付いた。日本で, 1人で行動していたとしても, 特に何も感じることはない。それが当たり前であり, 「1人でいる自分」に疑いを持っていないためだ。しかしインドネシアではふとした瞬間——ハムカ大学の学生たちとの間に隔たりを感じたとき, 皆がにぎやかに談話している中, 私だけが1人で黙ってしまっているとき——私は途方もない孤独を感じた。

なぜ日本では何も感じないのか, なぜインドネシアではこれほどまでに過敏になってしまうのか。私とハムカの学生との例から, その要因を考えてみた。

3.2 私と彼らの違いと共通点

ハムカの学生たちの行動を見ていると、1人1人が自分のペースで生活しつつもどこかつながっており、支え合っている。それはイスラームという絶対的な拠り所を共有しているために生まれる強固な心のつながりではないかと思う。彼らのそういった結びつきを感じたとき、私の中に「自分も受け入れられたい」「自分という存在を認められたい」という欲求が沸き起こる。そう考えているうちに、私が中学生、高校生だった頃、これとよく似た欲求を感じていたのを思い出した。その時に私が求めていたのは「親友」といった特定の個人、役割が担う支えであったが、それはいくら自分が望もうと相手が同意しなければ成立せず、もしつながりができたとしても、その関係が壊れてしまったら立ち直れなくなるような不安定なものだった。支えがほしいが、それを失ってしまったときのリスクも大きい、そんなジレンマに揺れていた私は結局選択したのは「あきらめる」ということだった。それが今の「1人であることへの無抵抗」に繋がっているのではないだろうか。ハムカの学生と比較すると、かつて私が欲していたつながりはとても小さなものだったことが分かる。自分はムスリムである—それは彼らが世界中に存在する何億人もの仲間と共有するアイデンティティである。それは私が想像する以上に力強く、彼らに誇りと安心を与えるものであるのだろう。

一方でハムカの学生が常に人間関係において満たされているのかということそんなことはないようだ。10日間行動を共にし、ハムカの学生は1人で孤立しているという状態の人が少ないように思えた。その様子に興味を持ち、たまたまバスで隣に座っていた男子学生「あなたはずっと誰かがそばにいたら疲れない？」と質問してみた。すると彼は「少し疲れるかな」と答えてくれた。学生の中にはそういったことは全く苦にならないと話していた人もいた為、この意見を聞き少しほっとした。彼曰く、自分は中学、高校時代あまり人とつきあうのが得意ではなかったから大学では頑張っている、のだそうだ。これを聞き、ふと、彼らも私と同じ大学生であるのだなと思った。彼らには心から信じる宗教があり、多くの暖かな人とのつながりを持っている。私にはあまり縁のないものに囲まれる彼らを、いつの間にか自分とは全く異なる人間のように感じていた。しかし、彼らも年相応な人間関係や生き方への悩みを持っているのだと思うと、私たちは生まれた環境や思想が違ったところで、やっぱり同じ人間であることに変わりはないのだと実感した。その気づきは私にとってとてもうれしいことであった。

3.3 私たちは同じ人間である

ハムカの学生は知り合ってもない私たちを「ベストフレンド」と呼んだ。インドネシアにいた間は、その言葉の持つ重みと、出会ったばかりの私たちの関係が釣り合っているとは思えず、どうしてもこちらからその言葉を使うことができなかった。しかし今なら国や性別、人種といった枠組みを取り払い、クリアなまなざしで彼ら、彼女らと向き合うことができるように思う。そして自信を持って「あなたは私のベストフレンドだ」といえるだろう。なぜなら私たちは同じ「人間」であるのだから。

おわりに

自分なりに今回のプログラムを振り返ると、数えきれないほどの発見や驚き、戸惑いがあったけれど、中には気づかずに通り過ぎてしまった面白いものや興味深いものもあったのではないかと思います。初めて訪れた土地や接した人々に戸惑い、臆病になり、自分の殻に閉じこもってしまったときもあった。プログラム中に得た気づきのなかにも、帰国後の日本での生活の中で薄れて行ってしま

った部分もあるように思う。しかしそういった後悔と同じくらい得られたものも多かった。仲間と意見を共有し、もう一度自分経験を振り返ることで新たな視点に気付くこともあった。

そんな貴重な経験の場を作ってくださり、私を暖かく迎え入れてくれたハムカ大学の先生方、OBの方、学生の皆、そしてホストファミリーとしてお世話になったリナ先生とご家族の方には感謝してもしきれない。何度でも心の底からお礼を言いたいと思う。私はこのプログラムに参加して本当に良かったと思っている。だから、この経験をここで終わらせてしまうのではなく、これから先もインドネシアで得た課題や違和感を自分なりに解きほぐし、吸収したい。今まであたりまえだと思っていた考え方や制度に流されず、自分の頭で判断していきたい。またインドネシアの土を踏み、あの賑やかな友人たちと抱き合いたい。せっかく得たつながりをここで絶やすことだけは絶対にしたくない。インドネシアでの経験は1度きりの思い出にできるような生易しいものでは無かった。今回のプログラムでの喜びと後悔をバネに、これから私自身の視点でインドネシアで暮らす人々やイスラームを見つめ、それらを心に沁みこませていきたい。

多くの愛と温もりに抱かれて ——私をこれからも成長させてくれるもの—— 地域学部 2年

はじめに

インドネシアでの経験はひとことというなれば、「かけがえのない出会い」に満ち溢れていた。出会ったのは、単にインドネシアの人々や物事だけではない。そこで私は多くの気づきを得たし、それによって自分の家族や友人とのあり方など、今まで自分自身、考えも気づきもしなかったような一面も少なからず見えてきた。そういった意味で、自分の知らなかった自分にも出会うことができた。

また、わずか10日間の経験であったが、そこにいるとき私は多くの楽しさや喜びを感じ、確かに幸せを感じられた。怒涛のように過ぎていった毎日の中で、人びとのエネルギーに満ちた温かい渦に入り込み、私の心は元気になった。ここでは、そうした経験の中で私が得た気づきや、そこで感じた思いを、なるべく分かりやすい形で伝えたいと思う。この経験は私にとっては実に意味のあるものになったので、共感否かに関わらず、これを読んだ人にとって、読んだという行為で終了するのではなく、何か思ったり、考えたり、感じたりできるものとなっていけば嬉しく感じる。

1. 考えること・賢くなること

1.1 違う「あたりまえ」と出会う

インドネシアで私が第一にショックを受けたこと、それはトイレ・お風呂についてであった。インドネシアのトイレに入ったのは空港が初めてだったが、そこで見た便器の形は私がそれまで見たことのない様式であった。どう使えばいいのか、わからなくてしばらく考えた。インドネシアに到着したその日はホテルでの宿泊だったので、まだインドネシアの水回り事情を詳しく理解できなかった。しかし、それ以後の生活の中で、インドネシアでは、トイレで紙を流せないことや、桶で水を汲んで流すところが多いこと、お風呂に関しては、浴槽はなく、シャワーも必ずしもついているわけではないし、お湯ではなく水を使うことなどが分かってきた。私にとって、このことは日本での生活とあまりに違いすぎて、なかなか受け入れられなかった。

特にカンブン・ナガという電気の通っていない村に行った時にその思いはピークに達した。その村では皆で共同のトイレ兼お風呂場を利用しているのだが、そこは四方を塀で囲われただけのもので、池の上につくられている。水で体を流すことで感じる寒さに加え、私はもともと暗くて狭いところが苦手なので、その不快さに拍車がかかったようだった。いくら流しても、日本でのお風呂上がりのようにすっきりした感覚を持てなかった。私はそこでは体を流すだけで髪を洗えなかった。日本とは違う「あたりまえ」に触れたとき、私は、それに順応することを極めて困難に感じたのだった。

1.2 「あたりまえ」を振り返る

私はこのような状況に大変に戸惑ったし、とても適応しきれなかった。しかし、インドネシアの人たちにとってはそれが「あたりまえ」であり、私のように、それに対して不快と感じることはないだろう。所が変われば、そこで通じる「あたりまえ」も変わってくる。私はそれを、身を以て感じた。もしかすると、インドネシアの人たちが日本に来たら、彼らは私がインドネシアで感じたように、日本の「あたりまえ」に対し戸惑いを感じるかもしれない。自分の持つそれとは違う「あたりまえ」に戸惑いを覚えるという事は、ごく普通のことであるかもしれない。しかし、ここで重要なのは、それに出会った時にそこから何かに気づき、考えることができるかということだと思う。

私は、違う「あたりまえ」に出会った時、いかに自分が日本の「あたりまえ」に安住して生きてきたのか気付いたのと同時に、そうした生活を送ってこられたことにありがたみを感じた。普段は目も向けられないような、些細で当然と思われるようなことに、感謝の気持ちを持てた。

日本に帰国してから、私は「あたりまえとは一体なんなのか」についてよく考えるようになった。その答えはまだ出ていないけれど、インドネシアで違う「あたりまえ」に出会ったことで、こうした問いを立てられたことは、自分にとってとても意義のあることのように思う。

1.3 みんなで賢くなる

「みんなで賢くなる」これは仲野先生が何度も言われていた言葉だ。以上にも挙げたように、違う「あたりまえ」との出会いで気付いたこと、そこから得た思考・感情。これは各々が自分なりのものを持っている。これをみんなである程度共有できたことで自分になかった発想を得て、自分の考えが広がっていくのを実感したし、自分の考えに対するみんなの意見から、その考えを深めることができた。これがきっと「みんなで賢くなる」という事なのだろうと思う。私はみんなで各々の思考や感情を共有することでそれを、ある程度できたように感じた。自分の得たものを自分だけのものにしないこと、みんなでも共有し賢くなること。このことは、インドネシアでの経験の中で私という人間を、成長させてくれた一つの要素になっていると強く感じている。

2. 分かち合いの関係

2.1 さらにだけす

今までの私は、誰かの手を借りて何かをするより、自分一人でやった方が自分の思いに、より近い形で成し遂げることができるような気がして、なにか課題や悩みがあっても自分一人で抱え込むことが多かった。しかしインドネシアに来て違う「あたりまえ」にであったとき、そこで抱えた水回りに対する悩みは、最初はその戸惑いや不快さに我慢するしかないのか...と考えていたが、もはや私にとって自分一人で解決できる問題ではなかった。しかし、ある時私の抱えていた悩みはいと

も簡単に解決したのだった。

それは、バスでの移動中のことだった。私は隣に座ったハムカの学生と話す中で、「インドネシアのお風呂は日本とは違って水だから私はなかなかそれを受け入れられない」ということを打ち明けてみたのだった。もしかすると、それはインドネシアのそうした文化を否定しているように捉えられてしまうかもしれないと少々不安ではあったが、そのとき私の中で葛藤もピークに達していたので思い切って打ち明けてみたのだった。すると、その学生は「ホームステイ先の人に頼んだらお湯を出してくれると思うから、家に帰ったら頼んでみると良いよ」とアドバイスをしてくれた。実際に頼んでみるとお湯を出してもらえたとし、それによって私の悩みはほとんど解決された。この経験を通して、何かを打ち明けること、自分の抱えているものをさらけ出すことで、人に意見や助けを求めることは決してマイナスなことではないという事に改めて気づけた。むしろ、よりいい方向へと事態を運ぶには自分で抱え込むより、はるかにそれが必要なときもあると教えられたような気がする。

2.2 純粋に相手を思うということ

私はその日家に着くとお湯を出してもらえないか頼んでみた。すると、ホームステイ先のお母さんは私たちのために快くお湯を沸かしてくれた。私の悩みを受け入れ、自分たちの文化とは異なる、私たちのライフスタイルに近づけてくれた。ここから感じた優しさに感動したし、今でも深く感謝している。

また、日本に帰国してから、インドネシアの学生と連絡を取り合う中で、その日の予定を話すことがあった。その中で何度かあったのが、「今日はこれから友達の悩みを聞きます」「さっきまで友達の悩みを聞いていました」という内容だった。そんなとき私が「悩みを聞いてくれるなんて～さんは優しいね」というと、大体どの学生も決まって「別に、やさしくないですよ。ただ、仲間が困っている顔を見るのは嫌ですから」と答えるのだ。

わたしは、人の悩みを聞くとき、いい人だと思われたいか、優しい人だとおもわれたいかという気持ちを少なからず持ってしまう。しかし、彼らは自分たちが優しいかどうかは重要としていない。相手が困っていたらその状況をどうにかしてあげたいという純粋な気持ちの上で悩みを聞いている。であるから、その悩みの理由がくだらない場合にはなおさらどうにかしてあげたいと思うようだ。

自分の悩みではなくても、そこに自分がよく思われたいかという欲なしに、純粋に相手のことを思い聞くこと、そしてその人にとってより良い状況にしてあげようとする。その分かち合おうとする行為にはとても愛があると感じた。

3. 家族の在り方

3.1 愛のある世界

カンブン・ナガ村にホームステイした夜のことである。そこは電気の通っていない村である。…その日の夜、アナ先生を通じてホームステイ先の家族と話した。その話の中で私たちは、お父さんは村での収穫物を売りに電気の通っている街に出稼ぎに出ることがあるという事を知った。村に電気を通さないのには、昔村に起こった火事の経験や、電化製品を揃えているか否かなどによる家庭同士の競い合いを防ぐためなどの理由があった。しかしながら、電気の通っている環境で生きてきている私たちには、電気が通っていないという事が不便なことのよう思えたし、電気のある暮

らしを知っているのなら、なぜ村を出て街で暮らそうと思わないのだろうか?と疑問におもった。そして、そのことを質問すると「家族のため」という答えが返ってきた。毎日頑張って働くのも、稼ぎに出るもの、村に戻ってくるのも「家族のため」。それを聞いた私は、日本での自分の家族との関係を考えずにはいられなかった。そして、それを考え出すと涙が止まらなくなった。

私は大学生になった今も実家で暮らしている。一人暮らしの友達を見ると自由でいいなと感じることがある。というのも、私の親は過保護なところがあり、私が一人でどこかへ行こうとしたり、帰るのが夜遅くなるとえらく心配して、あれはダメ、これもダメと言われることが少なからずあるからだ。私はそうした親の心配を、自分を束縛するものだとして強く感じていたし、それに反発し喧嘩することもあった。しかし、カンブ・ナガでその話を聞いたとき、きっとそうした親の心配も私のことを思い愛してくれているがゆえに起こっていることなのだと気付いた。それだけではない。両親が毎日一生懸命働いているのも、ご飯をつくってくれるのも諸々全てが「家族のため」なのだと改めて気付いた。それらの事は生活の中であたりまえのこととなっていて、見えにくくなってしまっていたのだと思う。そして、そうした愛情に対して、あるいは家族のために私はどれだけのことができたろうと深く考えた。特に何も出てこなかった。でも、互いに愛情を与えあったり、共有していけるような家族でありたいと思った。では、これからの自分ができることは何か。これまでの私は親の心配によって思うようにならない現状に対し、ただ反発するだけであったように思う。今でも親に心配されて自分の望むことが思うようにできないことはあり、満足できないことがあるのは事実である。しかし、その心配が愛情から起こっているのだと気付いたとき、以前のように単に反発するのではなく、両親が、私のことは心配しなくても大丈夫だと思えば安心してもらえる自分になることも大切だと思えた。そうすることで、心配という形の愛情に、安心感という形で愛を返すことができるのではないかなと思ったのである。

毎日の生活の中で当然のこととしてみなされてしまっていることは多くあるが、その裏には私たちにに対する愛情が隠れていることが多いのかもしれない。そう考えると、私たちは気づいていないだけで、実は溢れんばかりの愛のある世界に生きているのかもしれないと思い、少し嬉しくなった。

3.2 インドネシアでできた家族

インドネシアに行くと、そこには血縁だけでは語ることはできない家族関係があるという事が見えてきた。

カンブ・ナガで涙を流したとき、そのことに気付いた学生たちが私たちのもとに集まってきてくれた。「あなたは独りじゃないよ」「私たちはもう家族だから」そんなふうに声をかけてくれた。なぜ出会って数日の私たちに対してそんなことが言えるのかは全くもってわからない。私たちが逆の立場であったとき、彼らに同じように声をかけられるかという、そうはできないと思う自分があるのも確かである。しかし、そんなことを考えるよりも先に、私という存在を「家族」という輪に受け入れてくれたこと、「家族」として認めてもらえたことが何よりもうれしかった。

空港での別れ際に「You're my little sister」といつてくれた先生もいれば、「私たち兄弟みたいだね」といい、姉さんやねえちゃんと呼んでくれる学生もいる。ホームステイ先の家族も本当の娘のように接してくれていた。そこに血縁なんかなくても、「家族」という大きな人間同士の暖かい輪が確かに存在していたように思う。

帰国して5月に入るとハムカ大学では春祭りが行われる。それに仲野先生が来ると知った学生が何名か、「姉さんも来ますか?」と連絡してきてくれた。「大学で授業もあるし、いけないんだ。」

という、「そっか、さんねん。」と帰ってくる。このやりとりを通して、なんだか、インドネシアという日本から遥か離れたところで自分を待っていてくれる家族がいるのだという気がして、この時もまたとても嬉しい気持ちになった。

日本では家族というものに対して血縁や同居していることなどの要因や条件が存在しているように思う。だから、そもそも「家族」という言葉のもつ概念が異なるのだろう。しかし、そうした要因や条件なしに成立する「家族」はとても暖かく忘れがたい存在である。

4. ベストフレンド

4.1 なぜベストフレンドなのか——人を信用すること

私たちはインドネシア滞在中、ハムカの学生たちが幾度となく私たちのことをベストフレンドというのを聞いた。私たちの滞在期間はわずかに10間に過ぎず、しかも出会って間もない時点で彼らはすでにベストフレンドという言葉を使っていた。なぜ彼らは私たちのことを、ベストフレンドという枠にこんなにも簡単に受け入れてくれたのか疑問に思った。が、同時にそれは、なぜ私たちは彼らのように出会って間もない人をベストフレンドとして受け入れられないのだろうかという疑問へとつながった。私たちは、出会って間もない人どころか、出会って何年も経過している人でさえ親友と呼ぶことができない。実際に私たちが親友と呼べるのはごくわずかな人であることが多いし、親友なんていないと考えている人も多いかもかもしれない。では、私たちが誰かを親友と呼ぶとき、その人と私たちの間には何が必要とされるのか。私は信頼関係が親友という関係をなす一つの要素としてあると思う。

私たちが誰かと信頼関係を結ぶのは、私たちにとってその人に何か信用に値するものがあるからだと思う。言い換えれば、何か信頼できるものをその人に見出すことができなければ、その人を信用することは難しい。出会って間もない人に、そうした部分を見いだすのは簡単ではないだろう。だからこそ、なぜ彼らが私たちのことをベストフレンドと呼べるのか疑問だったのである。

私は人を簡単に信用することはまずないし、悩みなどをあまり人に打ち明けることなく一人で抱え込んでいたのも、そういったことに関係しているのかもしれない。仮に私が悩みを打ち明けたとしても、所詮他人事としてしか聞いてもらえないだろうとか、この人に相談したところで何も解決しないだろうとか、そういう思いがどこかにあった。実際私にとって親友と呼べる存在はごくわずかである。

ではなぜ、彼らは私たちをベストフレンドとして、ずっと受け入れてくれたのか。彼らが誰かを信用する時そこに特に大した条件は必要ないのかもしれない。つまり、そこに信頼するに至るだけの根拠が何か必要という事はなく、だからこそ、出会って間もない私たちをベストフレンドと呼べたのだと思う。

4.2 人の温かみ

私は人の目を気にする性分であるし、だから人と常に一緒にいると、少々気疲れしてしまう。私がよく一人で過ごしているのにはそういう理由もある。しかし、彼らが私たちのことをベストフレンドとして受け入れてくれたとき、私はその輪の中で気疲れすることはあまりなかった。むしろ、楽しくてどんどん元気になっていった感じだった。また彼らは人を一人にするという事がない印象であった。常にみな人の輪の中にいて盛り上がっている感じだった。一人でいることを苦に感じたことはあまりないが、こうした人の渦の中に身を投じたことで、そこにある人々のパワーのような

もの、そしてその中にある温かさに気づき、その輪の中にいることを何だか幸せに感じた。

4.3 認められる喜び

ハムカの学生と私たちで円になって手を重ね合い、「chibi chibi chibi a a a ah~」という掛け声を言う。こんな光景が滞在中に何度もあった。これは私たちがベストフレンドであるという事の象徴のようなものであった。

帰国の前日の事である。隣の空間からあの掛け声が聞こえる。私は他の学生と話をしているその輪に入ることができなかった。途中でその学生との話を切り上げるわけにもいかないが、内心「ああ、輪に入りそびれたなあ……」と思っていた。ちょうどその学生と話し終えたころ2度目の掛け声が聞こえてきた。隣の空間でみんなが輪になっているのが見えた。どうやら1度目に入りそびれた人も交えて2度目をしていたようだった。そして内心で「あ！また入りそびれたあ〜。残念だなあ、もうちょっと早かったら入れたかもしれないのに……」と、自分のタイミングの悪さと、またもや輪に入りそびれたことを悔やんでいた。私はそれに途中で気付いたので、とりあえず掛け声が終わってから、みんなのいる方にいこうと思って、終わるまで少し離れたところからその様子をうかがっていた。掛け声が終わるとすぐ、みんなが私の存在に気づいてくれた。すると、「あなたも！」とみんなが声をかけてくれ、私も円陣の中に加わり3度目の掛け声が始まった。このことは、私にとってこの上なく嬉しい出来事であった。すでに2回行われている掛け声。私一人が残されたからと言って3度目があるなんて私は考えてもなかったのである。私という存在に3度目の掛け声を行うだけの価値があると、みんなに認めてもらえたような気持ちになったのだ。誰かに認めてもらい、受け入れてもらうことがいかに嬉しいことなのかという事を感じたのと同時に、それが自分という存在に対し、「私は一人なんかじゃない、みんなが居てくれる」と思える自信にもなった。

おわりに

私事ではあるが、日本に帰国してから私は交通事故を起こしてしまった。少なからずパニックになったし不安も感じた。そのことを、あるハムカの学生に連絡すると、その学生は「何かの縁だな」と返してくれた。具体的にはよくわからないが、私はその言葉を「事故を起こしたことにはきつとなにか意味がある」というふうに解釈した。そして事故を起こしてしまったのには何か意味があると思ひ、普段の不注意さに対する戒めかもしれないとか、自分を心配している人がいるという事に気付かせてくれているのかなというふうに考えるようになった。そうすると、不安やパニックより、何か周囲に対する感謝の気持ちや、事故を起こしたものの生きていられてよかったという思いの方が強くなった。滞在中お祈りなどを見聞きしても理解しきれなく、どこか自分には遠い存在に感じていたイスラームであったが、「物事には必ず意味がある」という教えを通して以前より近いものに感じられた。

そして、すべての事に意味があるのだとすれば、きっと私がインドネシアに行ったことも、そこでたくさんの人や物事に出会ったこともすべて、私にとっては意味のあることなのだと思う。

正直なところ、インドネシアでの経験から、これを学び取ることができたという決定的な何かがあるわけではない。しかし得られた気づきは多かつたし、インドネシアに行ったことで、いづれ自分成長したと感じているのも事実である。たくさんの人の中で多くの愛情と温かさを感じることもできた。また、そうしたことを鏡として日本での自分の生活や振る舞いや人との関係性を振り返る機会にもなった。きっと、インドネシアでの経験は、何かを学び取ることができたと、ここで

完結させるものではなく、これからの自分の思考や感性、生活や振る舞いなど様々なことに対して、より掘り下げたり膨らませたりして、より豊かに育んでいくための糧となるものなのだと思う。実際私は「あたりまえってどういう状態のことをいうのだろう」とか「人は何に対して幸せをかんじるのだろう」とか以前の自分なら考えもしなかったような問いを得られたし、そうした問いや、インドネシアでの経験から得られたものがあるからこそ、考えられることや、感じることも少なくはない。そういった意味でもやはりこの経験は、私にとって大いに意味のあるものとなったことには間違いない。忘れることのできない、かけがえのない経験である。だからこそ、この経験から得られたものを、時の流れとともに失っていくという事になるべくないように大切にしていきたいと強く感じているし、それらを深めることでさらなる成長へとつなげていきたい。

生きることを見つめ直す

地域学部3年

1. はじめに

私たちは生きている。1人ではなく、関わり合いながら。あなたは1人ではない。私にはもうこの場所が、ここにいる人があるから大丈夫。そう思わせてくれたインドネシアでの10日間。かけがえのない仲間とともに時間を過ごし、インドネシアを、インドネシアで出会った人々のことを知り、同時に日本を、日本で出会った人、自分について見つめ直し、考える機会となった。インドネシアでの経験は、私が今までの生きてきた中で経験したことでと触れ合い、化学反応を起こして、また新たな価値観を自分の中に生み出した。それらについて述べていきたい。

2. 生きるために生きる人々

「私たちは生きるために生きてきたのだろうか。」今回のプログラムで気づき、考えたことの一つに、このことが挙げられる。

プログラムの前半、電気の通っていない、カンブン・ナガという村を訪れた。町から外れたその村は、霧に包まれて、私たちを迎えてくれた。川と森の間に、白い壁と萱葺屋根の小さな家が寄り添い合っている。少しひんやりする空気は、ジャカルタとは違って、ずっと胸まで染み込んでくる、澄んだものだった。到着すると、日本の学生とインドネシアの学生とともに、グループごとにホームステイ先を振り分けられた。村の家は、隣同士の距離がとても近く、密集していた。竹で出来ているというその家は、台所と、寝食をする居間の二つの部屋で出来ている。他の家も大体同じような造りだという。正直、初めて家の中へ入ったときは、とても狭いと思ったが、その狭さからか、次第に妙な安心感を抱くようになっていった。

ホスト先のお母さんが、明るいうちにと、トイレと風呂場へ案内してくれた。トイレ、風呂場などの水回りは、全て村の人で共用のものを使っている。家が立ち並んでいる場所とは別に、水田のような村の大きなため池があり、そのあぜ道の所々にトイレ兼風呂場がある。池の上に建っている状態だ。トイレは、四方を胸くらいの高さまで囲まれているが、屋根はない。去年訪れた学生から話は聞いていたため、覚悟はしていたが、実際にそこを使うとなると、なかなか勇気が必要だと思った。でもそれがここでの当たり前だけで、自分が住んでいるところと「当たり前」が違うだけなのだと納得した。どちらかという、インドネシアの学生の方が絶句していたかもしれない。女子学生の顔が少し強張っていたように思う。

私たちが入浴したのは午後8時ごろで、もう日が沈んだ後だった。お父さんとインドネシアの学生がランプを持って、わずかな明かりを提供して待っていてくれた。夜の村はずっとした闇に包まれていて、とても静かだった。森から何か出てくるんじゃないかと少し怖かったが、虫の声か鳥の声か、何か生き物の声が、日本の田舎の夜に聞こえるカエルの声のように静かに響いて、慣れたころにはきれいだなと感じられた。私はこの村での滞在が2度目となる〇〇さんと入浴したが、〇〇さんは、「なんだか自分がこんな状況でいることが段々面白くなってこない？」と楽しそうに入浴していて、自分もそれにつられて楽しくなっていた。もちろん出てくるのは水なので、寒い。しかも、その水もちょろちょろと少しずつ流れてくるだけなので、いつものように髪を洗い、体を洗い、流すことになかなか苦労した。

当たり前のことが当たり前にできない。竹とコンクリートでできた風呂場の壁に置いたピンクのプラスチックのシャンプーの容れ物が、あまりにも不釣り合いで、その輪郭が際立って浮いて見えた。自分の当たり前と、このカンブン・ナガでの当たり前が全然違うことを象徴しているようだった。そもそもこの水、本当に綺麗なのだろうか。昼間見たときは濁って見えたような...などと思ったが、浴びてしまえばさっぱりした気持ちになれた。服を着た時のぬくもりと安心感もひときわだった。

お風呂を浴びた後、寝るまでの間にお父さんが村のことについて話してくれた。ランプを囲んで、みんなの顔がオレンジ色に照らされる中、私たちの質問をインドネシアの学生がインドネシア語に訳して、お父さんに聞いてくれ、その答えをまた日本語に訳して伝えてくれた。お父さんは普段スダ語を使うので、インドネシア語は久しぶりに話すと言っていた。村は113世帯、315人いること。ここは自分の娘家族の家で、自分の家は川の向こう側にあること。楽しみは竹の楽器で音楽を演奏すること。病院も市場も遠いこと。たくさんのお話を話してくれたが、印象に残ったのは、今と昔でこの村は何か変わったかという質問に対し、お父さんは、「変わったといえば変わった。昔はもっと伝統的で、水を飲むことだけでもっと難しかった。」と言っていた。現在は家を建てるのに木を使っているが、昔は木を使うことも許されず、竹のみを使っていたという。ランプもなかった。私たちにとって伝統的に見えるそれらの文化にも、更に遡ると、より伝統的な暮らしをしていたのだと感じられた。

翌朝、4時半ごろに鶏の鳴き声を聞いて起床した。鶏のコケッココーという鳴き声で起きることが、本当にあるのだなと思った。まだみんな眠っていて、日は上っていないため、もちろんまだ暗い。起き上がると、台所でお母さんが朝ごはんの支度をしていた。懐中電灯の僅かな明かりで、テンペイという豆で出来た加工食品に衣をつけて揚げてくれている。言葉は通じないが、おはようございますという、大きな笑顔で返してくれた。後から聞いてみると、お母さんは3時から起きてご飯の支度をしてくれていたらしい。段々と空が白んで、自然の明かりで周りが見えるようになっていく中、お母さんがテンペイを揚げる様子を眺めながら、〇〇さんと話をした。

忘れかけていたけど、そう遠くない過去、まだ私が小さかったころは、まだ少しでもここに近い生活をしていた。実家のトイレは、今のような便座のついた水洗のトイレではなく、いわゆるポットトイレだった。そのトイレの下に貯まった汚物は、祖父が畑の肥やしになる。定期的にバケツに汲み上げ、畑に運んでいた。また、近所の湧水を地区のあちこちに水路で引いた、共用の水道は、自然の冷蔵庫になる。夏でも冷たいその水に、スイカやきゅうりなどの野菜を浸けていた。辛うじて残っているだろうかと思うのは、薪で炊く風呂である。しかし、ボイラー付き。〇〇さんが去年のことを話してくれた。

それまではご飯をコンビニで済ませていたけれど、ここに来てそのことを考えさせられた。私たちに電気もガスもある。それなのに自分たちで自炊もせず、一体何を求めているのだろうか、と。ここにいる人たちをどこかで不便で不自由なのはと勝手に思っていたけれど、この人たちは自分たちに必要なことを十分に得て生活している。生きるために生きている。私たちは便利さを求め、それを少しずつ得ながらも、生きるために生きていない。生きることをおろそかにしながら、何かを消費して生きている。そう強く思った。ここのお母さんたちは、自分たちが生きるのもいっぱいいっぱいの中で、私たちのために、たくさんのごちそうを作ってくれた。まだ真っ暗なうちから、食べきれないほどのテンペイを揚げてくれた。それを考えながら改めてお母さんの笑顔を見ると、感謝の気持ちでいっぱいになり、涙があふれてきた。

「生きるために生きること」について考えさせられたのは、カンブン・ナガだけでなく、カンブン・バンダンというスラム街へいったとき、街の市場へ行ったときにもあった。

街の市場は、自分の想像通りでも、予想外でもあった。まず、その市場は建物の地下にあった。空気がこもっており、蒸し暑い。人も多く、生の魚や肉、様々な臭いが混じり、正直普通に呼吸をしていられなかった。まさに大地を飛び出てそのままやってきましたという出で立ちの、見たこともないような種類まである野菜たち。ここにあるものはすべて、さっきまで命があった、鮮度のあまるものばかりだ。何より驚いたのは、鶏をその場で裁いている光景だった。インドネシアでは、家庭の庭などでも放し飼いされている、鶏そのままの姿で、市場ではかごに入れられている。注文が入ると、その場で首を落として裁くらしい。日本では見られない光景に、是非見てみたいと言った。

私たちは日本で、鶏肉を買う時、すでにパックに入れられ、カットされた状態のものを見る。実際に普段口にする鶏肉が、どのようにあのパックに入れられたかたちになっているのか。どのように命が奪われているのか。私にはそれを見る責任があると思った。あると思ったのに、見たいと言ったのに、実際その首を切る瞬間になると、目を向けていられなかった。鍋に鶏が入られた瞬間にそちらを見ると、床に血が飛び散っていた。鍋の中で暴れる鶏。首を切られたはずなのに、聞こえてくる苦しそうな雄叫び。そのあとしばらく、胸の動悸が収まらず、落ち着いていられなかった。隣では魚屋さんが魚をさばっていた。魚の首を落とすシーンは難なく見られた。なぜ魚の首が落とされるところは見れるのに、鶏の首が落とされるところは見れないのだろう。その疑問を抱いたことにも、なんだかショックだった。鶏が絞められるシーンは、普段日本で暮らしているときには見ないが、「見ようと思えば見れるもの」である。そのとき、見ようと思えば見れるのに、見てこなかったものがあまりにも多かったことに気が付いた。私たちは普段、目に見えないところでつくられ、準備されたものを食べて生きている。それから出たごみや、排せつされたものも、知らない誰かが、目にみえないところで後処理をしている。そういうものの上で、私たちは生きている。汚いものにふたをして、最低限のことだけで満足して、生きるのに必要な物を、狭くとらえて。それでも自分で料理をすることさえも怠って、生きようとしていたのが、情けなく思えてきた。私たちはどういうものの上で生きているのか。それも十分に知らずに、知ろうとせずに生きてきたことを反省した。「生きるために生きる」ことを私は選択出来ているのだろうか。

2.1 人と人との間にある魔法

インドネシアの学生たちが持つ、あのパワーの渦は一体何なのだろう今思えば、インドネシアの学生と、仲良くなったタイミングを思い出せないくらい、いつの間にか打ち解けていたような気がする。結婚式会場で手をひかれ、次から次へと料理を手渡してくれ、「これは〇〇っていう料理で、

すごくおいしい!」「これは辛い」「これはまずい」などと色々教えてくれた。「これ飲む?」「暑くない?」とたくさん気にもかけてくれた。気が付いたら一緒に踊っている。気が付いたら一緒に歌を踊っている。10日間一緒に過ごして、表裏なくやさしく、素直な人たちなのだと感じた。それが私にとっては、あまりにもまぶしく、羨ましいものだった。私は日本にいるとき、人との距離感のとり方、関わり方がわからず、いつも苦心していたように思う。インドネシアにいる間は、どうして日本にいたころは、あんなに苦しんでいたのだろうか?と思うほど、みんながやさしく、温かかった。

結婚式に参加しているとき、暑いのが苦手な日本の仲間を見つけ、「Don't cry! Don't cry!」と寄り添い、歌を歌って励ましていた。その姿がまぶしくて、こちらが泣きそうになった。人をこうして励ますことって、頭でわかっているけど、なかなかできない。この子たちには私たちの持っていない、何か不思議なパワーがあるような、そんな気がした。インドネシアで出来た友達は、私たちと同じように、若者言葉を使ったり、恋をして悩んだり、はしゃいだりして、それを友達同士で話して盛り上がる。流行の歌も好きだ。それに、疲れた時は眠るし、いつでも明るくて前向きなわけでなく、それぞれの悩みを抱えて、苦悩している。だけれども、私たちよりも、もっと素直にはしゃいで、笑って、人にやさしくすることが出来る。

私たち日本人は、見えないところを多く考えがちだ。少なくとも、自分はそうであると思う。人の気持ちを慎重に慎重に伺う。少しでも相手の気持ちををはき違えて言葉を選ぶと、自分を否定されたり、相手を怒らせたり、もう相手にされなくなってしまうかもしれないと思うからだ。そのため必要以上に用心深くなってしまい、素直な言葉を相手にぶつけることが出来ない。でも、用心深くなりすぎることによって、また相手とすれ違ったり、トラブルが起きてしまうことも増える。自分自身、そんな体験が多い。インドネシアの学生と関わっているとき、そのようなストレスはほとんど感じられなかった。あれだけ集団で、感情のまま素直に楽しんでいると、こちらも有無を言わず、引き込まれて、いつの間にか笑顔になってしまっている。その瞬間の楽しい事といたら。

そして、いつでも自分を仲間に入れてくれる。10日間の間に、何度も円陣を組んで、私たちはBest friend!と叫んだ。後から来た仲間がいても、必ずその子を入れて、もう一度円陣を組む。おいでおいで、といつでも手招きをしてくれる。こうして友達だと言ってもらえることが、仲間に入れてもらえることが、こんなにも嬉しいものだとは思わなかった。もっと素直に感情を出していいんだよ。そう言ってもらえているようで、自分を受け入れてくれる安心感を持って、あの場にいることが出来た。だからこそ、この10日間の間にたくさん笑うことが出来たし、たくさん泣くことが出来たのだと思う。

「私たちはいつでも日本のみんなのことを心配しています。しんどそうにしていたらどうしてあげたらいいだろう。泣いているときは、眠っているときは、どうしてあげたらいいだろうと、いつも考えて行動しています。十分に対応してあげることはできないかもしれないけど。」バスの中でそう話してくれた学生がいた。また、その学生は、どの子が可愛いから、緊張してうまく話せないだとか、家族の赤裸々な話など、バスの移動の長時間の中でたくさん話を話してくれた。「〇〇さんと話すのは、最初は緊張していたけど、もう友達になったから大丈夫、隠すことは何もないです。」と言ってくれた。どうしてそこまでのことが、出会ってまだわずかだというのに、言ってしまうんだろう。否定的な意味ではなく、感動して、そのように思ってしまった。そもそも「友達」だと、出会って間もないのに言い切れるのか。

日本にいと、どこまでが「友達」なのかと考えてしまう。いつも一緒にいる人でも、物理的に

遠く離れている人でも、何か肩書を当てはめようとして、でもそれを確かめ合うことも憚られて、結局自分は孤独なのではないか、と思ってしまう。インドネシアの学生は、そんな無理強いを私たちに考えさせず、「友達だよ！」ととてもシンプルに言ってくれる。こちらを認めてくれる敷居も低いし、自分のことをさらけ出してくれる敷居も低い。インドネシアの学生が持つ魔法とは、もっと素直に、シンプルに人と接することなのだろうかと思った。そうすることで、人と人とがお互いに近づきやすくなり、触れ合えるのだろうかと思った。

インドネシアに滞在している最中、「家族」という単語をたくさん聞いたのも印象的だ。アム先生のお宅へお伺いしたときのお父さんの話は、印象に強く残っている。アム先生のお父さんは、日本がインドネシアを植民地として支配していたころの話を詳しくしてくださった。「日本人はとても厳しかったが、それがなければインドネシア人は成長できなかった」と、お父さんは言う。「喧嘩も歌も踊りも、そして戦争の仕方も、日本人が教えてくれた。オランダをはじめとするヨーロッパの人々は、300年以上支配していたにも関わらず、何も教えてはくれなかった。日本人はたった3年半の間にたくさんのことを教えてくれて、オランダに勝つことが出来たし、独立を果たすこともできた。日本には感謝をしている。」私はこのお父さんの言葉を聞いて、複雑な気持ちになった。私は、その時代を語るものとして、以前フィリピンの博物館で見た絵が忘れられないでいる。フィリピンも日本に支配されていた時代があったが、国立博物館には、当時の生々しい状況が描かれている絵画が多く展示されていた。私の脳裏に焼き付いて離れないのは、日本兵が民家を襲い、女性の胸に刀を突き刺し、その夫が他の日本兵に押さえつけられながら見ている様子を描いた絵画である。日本兵のあまりにも恐ろしい鬼のような表情と、恐怖と悲しみで歪んだ、襲われた夫婦の表情を、私は忘れられないでいる。この状況を後世に伝えなければ、という作者の想いが伝わってくる絵だった。アム先生のお父さんの話を聴きながら、その絵がずっと頭の中に浮かんでいた。帰り際、「泊まっていきなさい。あなたたちはもう私の家族なのだから。」と言ってくれた。

最終日、リナ先生の家にもみんなで集っているときも、先生の家へ集まった（そもそも日本ではこんな風に先生の家に来ることがなかなかない）。というより、親戚の集まりのようで、日本にいるときよりも、ずっと距離が近く、安心できる空間だった。先生の学生の間の距離も、とても近いと感じた。先生と生徒というよりも、親子や兄弟のように見えるシーンが沢山あった。しかし、ちゃんと礼儀もある。日本では見られない光景だ。

「家族」とは一体何なのか。このプログラムを通して、私は何度も考えた。私は家族にたいしてちゃんと愛があるのか。恥ずかしながら、私は家族と話すべきことも、話したいことも、何も話せていなかった。いつからかバラバラになってしまっていた。ホームステイでお世話になったホストファミリーが、「家族は何よりも大切だ」と言っていたのを忘れられない。ホストファミリーは、お父さん、お母さん、そして兄と妹の2人兄弟。一緒に過ごした時間は決して長くなかったが、キャン・ナガなどのエクスカッションから帰ってきた日は、もうすでに、その家に安心感を抱いていて、急に、数日経ったら日本に帰らなければならないことがすごく寂しく感じていた。その時に思わず、「もうここの居心地がよくて、みんなのことが大好きになったから、ここを離れたくない」とお母さんに伝えた。するとお母さんは、「私たちは至らないところもたくさんあるかもしれないけど、ごめんなさい。私たちはもうみんなあなたたちのことを家族だと思っているから、どうかこの家のことを忘れないで、またジャカルタに来たらここによって下さいね。」と返してくれた。ここの家族とは、言葉がなかなか通じなかった。けれども、いつもお母さんの料理はおいしくて、たくさんのことを気にかけてくれて、私たちが過ごしやすいようにと施してくれた。妹のような11歳の娘さん

も、日本語の本を買ってもらって、一生懸命コミュニケーションを取ろうとしてくれた。みんな、愛のある行動をしてくれていた。私は日本で家族に、友達に、愛を持って行動できていただろうか。家族など、距離が近くなればなるほど、それに甘えてしまって、あいさつさえもないがしろにしてしまっている気がする。家族ではない人の方が、愛のある行動をとれてしまっている、矛盾した自分に気が付き、ショックを受けた。日本にいる、自分の家族の顔を一人ずつ思い出すと、涙が出た。「家族を大切に」という、ホストファザーの言葉をきちんと日本に持って帰って、家族に向き合い直そうと思った。インドネシアの家族は、私に愛を持って人と接するという、大切なことを気付かせてくれた。

2.2 その後日本で

日本に帰って来てしばらく経ち、あつという間に、日常に飲み込まれていってしまった自分がいた。たまにインドネシアでの写真を見返すと、あの頃あんなに素直に笑っていたっけ？と少し驚く。日本に帰って来てから、やはりインドネシアで感じた日本とのギャップは間違っていなかったと、再認識することがよくある。日本に帰って来て、イスラームに良い印象を持っていない人や、先入観で受け入れてくれない人にも何人かあった。そうじゃないよ、というのだけれど、インドネシアで感じた、「もっと自由で、明るくて、閉鎖的なものじゃないんだよ、あのパワーに私はとても感動したんだ！」という思いを、言葉で上手く伝えられなかった。それがとても悔しかったのと、こうしてもっとたくさんの人に伝えていかなければならないと思った。

私がこのプログラムで得たのは、かけがえのない友達、人とのつながり、場所とのつながり、そして自分の中に生きる経験である。足元レベル、日常レベルでの「生きること」について教えてもらった。私にはもうあの人たちが付いている、あの場所があることを知っているから大丈夫、と思えば安心できる。これらの想いを胸に、インドネシアで見つけた課題を解いて、生きていきたい。

インドネシアの人々の「あたたかさ」から学ぶ

地域学部3年

1. はじめに

私がインドネシアで暮らした10日間は、短い時間だったけれど、時間なんて関係のないくらいたくさんの気づきや発見や愛情が詰まっていた。ハムカ大学の学生や先生方、現地で出会った人々、そして日本人メンバー、気づきの分だけ様々な人との関わりがあった。そんな関わりの中で感じたことは、インドネシアには私たちを受け入れてくれるおおらかさや陽気さがあるということだ。彼らのおおらかさに受け入れられ、彼らの陽気さに笑顔をもらった。帰国後、インドネシアで撮った写真の私を見て、友人が、「すごく楽しそうな顔！」と言ったのを聞いて、本当に楽しかったのだなと再確認した。

いい意味で、インドネシアから帰ってきてからの方が、現地での気づきや愛情に苦しめられる。インドネシアで感じ取った様々な気づきをどのように生かせるのか、インドネシアで出会った人々にどうやったら恩返しができるのか、考えれば考えるほど悶々としてしまうこともあった。事前学習の時に仲野先生が何度も「プログラムから帰ってきてからがスタートだよ」と言っていたことが、なるほどなと思えるのである。今私に出来る、一番の恩返しはインドネシアで出会った人々へ、感

謝の気持ちをしっかり伝えることだと思う。そして、私の書いたレポートを読んでもくださる方々に、少しでも私の感じたインドネシアでの経験を共有してもらえれば幸いである。

2. インドネシアで出会った人々の3つの「あたたかさ」

私はインドネシアで出会った方々の底抜けの明るさに元気をもらい、彼らのあたたかい心に触れた。インドネシアから帰ってきて数か月が経とうとしている今でも、インドネシアでの10日間で感じた彼らのあたたかさは忘れることが出来ない。以下では、インドネシアで出会った人々のおおらかさ・陽気さを、私なりに3つの「あたたかさ」として、それぞれ表現していきたい。

2.1 肌で感じる「あたたかさ」——安心感を与えてくれる距離

インドネシアに来て、まず驚いたことは、ハムカ大学生たちの距離の近さである。日本では友達同士で、しかも同性でスキンシップを取り合ったり、肌と肌で触れ合うことがあまりない。その人のパーソナルスペースに無理に入っていくことは失礼なことのように思えるし、相手に嫌われたらどうしようと考えてしまうからだ。私自身、普段から頻繁にスキンシップを取るようなことはしてこなかったし、ついつい相手との間に壁を作っていたように思う。

でも、ハムカ大学生のみんなはそんな壁をいつの間にか取り払ってしまう。こちらが考える間もなく、自然と近い距離に彼らは入ってくる。だからと言ってそこに嫌な気持ちは全く生まれず、むしろなんだか安心感を与えてくれるのである。

インドネシアに来て一日目の学部長先生の娘さんの結婚式の時のことである。ほぼ初対面であったのに、ハムカ大学の子たちは、「こっちこっち」とか「これ美味しいよ」とか「次は何が食べたい？」とぐいぐい私の手を引っ張って、腕を組んで案内してくれた。写真を撮る時も、ぐいっと体を寄せて、そして腕を組む。最初は慣れないことに、どう対応したらいいか分からなかった。でも、時間が経つごとに、その距離感がなんだか心地いいと感じ、楽しくなるのである。自然と、写真を撮る時は、自分から手を差し伸べにいってしまうくらい、自分でも無意識のうちに相手との距離感が近くなっていることに気づく。

私たちとの距離もそうだが、学生同士の距離も近い。最終日、リナ先生の家でみんなが集まってお昼ご飯を食べたり、それぞれ思い思いの時間を過ごしていた時のことである。日本人メンバーがヒジャブを被り終わって、それぞれ自由に過ごしているとき、部屋に戻ると、ハムカ大学の女の子たちと数人の日本人メンバーがみんな一緒になって一つのベッドの上に寝転がっていた。先輩・後輩関係なく、同じ一つの空間に身を寄せ合って、楽しそうにおしゃべりをしているのである。肌と肌が触れ合う距離で接している彼らだからこそ、そこには先輩・後輩の壁を越えて、心を許せる関係が築かれているようにも感じられた。

彼らの距離の近さは、物理的な距離だけでなく心の距離も縮めてくれるように思う。心の壁をすっと壊してくれるようで、だからこそ、10日間という短い期間であったのにも関わらず、こんなにも密度の濃い時間を彼らと共に過ごせた。初対面の人であっても、こうやってすぐに仲良くなったのは、彼女たちと私たちの肌で感じられる距離感があったからだということがわかった。

2.2 周囲を巻き込む「あたたかさ」——みんなといるから楽しい

インドネシアの人々は、周囲を巻き込みながらみんなで楽しもうとする「あたたかさ」がある。私もいつの間にかインドネシアの人々のペースに巻き込まれ、一緒になって笑っていることがたく

さんあった。みんなとワイワイしているときのみんなの顔はとてもイキイキしていて、「個」ではなく「共同体」に重きを置くイスラームが垣間見れたような気がする。

そう感じたエピソードをいくつか紹介する。インドネシアでのバス移動は、日本でのバス移動の時とは全く雰囲気が違う。常に「音」で溢れ、賑やかである。最初は数人で始まった「山手線ゲーム」がいつの間にか十数人の輪にまで広がっていたこともあった。誰か一人が歌いだすと、それにつられてみんなで合唱が始まる。そしてそんな時、ハムカ大学の学生は「一緒にやろうよ」とか「一緒に歌おうよ」と、輪の中へと入れてくれようとするのだ。また、ハムカ大学で開催された国際セミナーに参加したとき、セミナーが終わって後片付けが始まっているのに、ハムカ大学生が「みんなでゲームをしよう」と言って、ゲームが始まったことがあった。少し周りの目が気になったが、いつの間にかそんなことは忘れて楽しんでた。みんなと一緒にワイワイと楽しさを共有出来ることが嬉しくて、輪の中へぐいぐいと引き寄せてくれる彼女たちの「あたたかさ」がとてつもなく嬉しかった。嬉しかったと同時に、日本ではあまり見られない光景だったからこそ、うらやましくも思えた。

日本の場合だったらどうだろうか。もし、バスの中で歌って踊っている人がいたら、みんなが一緒にになって楽しむだろうか。インドネシアで経験したような、一体感を味わうことが出来るだろうか。私は、なかなか難しいことなのではないかと思う。バスの中では、静かに座っていたり、寝ていたり、話したとしても近くの人たちと小声で話したり、少なからず周りの目を気にしてしまう。「うるさい」とか「うざい」とか思われたらどうしようと、出来るだけ目立たないようにしてしまうかもしれない。ましてや、セミナー後の会場でキャーキャーと遊ぶことはもってのほかのように思われる。それはより日本人が「個」を重視しているからだと思う。悪く言えば、閉鎖的とも見られるかもしれない。

だからこそ、インドネシアで感じた巻き込み・巻き込まれる関係は、開放的でイキイキとして見えた。「みんなといるから楽しい」という思いを共有しているかのような一体感が彼ら彼女らからは感じられたように思う。

2.3 私たちを受け入れてくれる「あたたかさ」

インドネシア滞在を通して、私にはたくさんの大切にしたいと思える存在が出来た。また、大切だったのだと気づかされる存在もあった。そう思えたのも、インドネシアの人々が私たちを受け入れ、そして認めてくれたからである。私にはインドネシアでいつの間にか「家族」が出来たし、「親友」も出来た。ここでは、私を「家族」として、そして「親友」として受け入れてくれたインドネシアの方々への感謝の気持ちとそこでの気づきを述べていく。

家族

海外渡航が初めてであった私にとって、ホームステイ先の家族は、初めての国を越えた「家族」であった。初めは本当にここでやっていけるのだろうかと不安であった。ハムカ大学生もいるし、日本人メンバーもいる。生活をしていけることは分かっていたのだが、ホストファミリーと仲良くなれるかどうか心配だった。言葉が通じないことが、これほどまでにもどかしく、歯がゆいものであることが身に染みて感じられた。

そんな私たちをホストファミリーのみんなは優しくもてなしてくれた。インドネシア語を私は話せないし、日本語も英語もあまり通じないけれど、ホストファミリーの優しさは言葉がなくても伝

わってきた。毎日ご飯を作ってくれるお母さん、ハムカ大学までいつも車で送ってくれるお父さん、英語で話し掛けようとしてくれるお兄ちゃん、そして一緒に遊んでくれる妹、みんなのそれぞれの愛情が本当に嬉しかった。

私がそのように感じた瞬間を少し紹介したい。夜ご飯を食べているとき、お母さんが、「明日の朝ごはんはなにがいい？」と、声をかけてくれたことがあった。その一言がとても嬉しかった。直接お話をしたり、長い時間家にいることは少なかつたけれど、それでも、私たちのことを受け入れ、私たちのために作ってくれていることがたまらなく嬉しかった。家に帰るといつもきれいになっている部屋も、私たちのために買ってきてくれたドーナツも、全てにお母さんの私たちへの愛を感じるのである。お父さん (Desvian 先生) も、いつも「もっと食べてね」とご飯をすすめてくれる。インドネシア語で何を言っているかは分からないけれど、その表情とジェスチャーで、私たちをもてなしてくれていることがわかる。プログラムの最後には少し日本語を練習していたのも、私は胸が熱くなった。

「家族」なんて、そう簡単に出来るのだろうか、プログラムの最初はそう思っていた。しかし、プログラムの終わりが近づくたびに、もうすぐでみんなに会えなくなるのかと思うときみしくて、またここに帰ってきたいと強く思った。「インドネシアに来たら、またここに来なさい」と言ってくれたお父さんの言葉を聞いたとき、もう私たちは「家族」なのだと思えた。私たちを受け入れ、「家族」だと言ってくれる人がいるだけで、こんなにも喜びを感じられるのである。帰る場所を用意してくれた彼らの優しさや、「家族である」と受け入れてくれた彼らの「あたたかさ」は本当に感謝してもしきれない。

そして、新しくできた「家族」について考えるとき、ふと日本の家族のことが頭をよぎる。私は今まで、「家族」について、何の疑いもなく当たり前存在だと思っていた。両親や姉妹、祖母の存在が当たり前になりすぎて、感謝することをおろそかにしていたことに改めて気づかされる。アイム先生のお父さんが私たちのことを「娘」だと言ってくれたり、カンブシ・ナガでは、村の人々が、「村の人たちはみんな家族」だと言っていたり、ホストファミリーが「またここに来なさい」と言ってくれたり、血は繋がっていないのに、みな「家族」として私たちを受け入れ、愛情を持って接してくれた。インドネシアで感じた愛情には感謝できるのに、一番身近に存在し、私を包み込んでくれている愛情には感謝できてないのだ。これからはもっと「ありがとう」という言葉をかけたいし、「家族」という存在がかけがえのないものなのだとすることを忘れないでいたい。

親友

「家族」という言葉以上にインドネシアで印象に残った言葉がある。それは「親友」という言葉である。ハムカ大学で行われたワークショップで、私たちは「一人の時間」について発表した。日本人学生が一人を選ぶ理由や、その選択の裏に隠された本当の気持ちについて発表し、ハムカ大学生たちと議論を交わした。その中で、「親友」の話になった時、ハムカ大学生たちが私たちに向かって、「ベストフレンド！ベストフレンド！」と何気なくこう言ったのである。本当に何気ない一言であったが、この一言の威力はすごかった。彼女たちはきっと何気なく言った言葉だったかもしれないけれど、そんなに簡単に「ベストフレンド」と言ってしまう彼女たちのおおらかさに驚かされた。

ワークショップの後にはこんなこともあった。ハムカ大学の学生たちが日本人メンバーのところへやってきて、円陣を組もうというのである。突然のことでわけも分からず、集められるがままに円陣を組んだ。「chibi chibi chibi a a a ah~」という掛け声のもと、体を揺らし、手を高く上げた。

ハムカ大学の学生たちは、私たちのことを「ベストフレンド」だと言ってくれるのである。円陣を組んでいる最中も、ワークショップが終わって部屋から出ていく時も、ずっと涙が出そうだった。「ベストフレンド」になることがこんなにも簡単であるなんて思いもしなかったし、一緒にいた時間の長さは関係ないのだということが驚きでもあった。しかし、「ベストフレンド」と言ってくれることは素直に嬉しくて、誰かに認めてもらったり、受け入れてもらえることの嬉しさを感じた。

ここでは日本とインドネシアの「親友」の捉え方の違いに気づく。日本では、友達の中でもより深く、親密な仲のいい存在を「親友」だと考える。しかしインドネシアでは「親友」と「友達」は同じなのだ。バスの中である学生に「親友はいますか？」と尋ねた。すると、「親友はたくさんいます。親友と友達是一緒です」と返ってきた。時間や国籍は「ベストフレンド」になるのに関係ない。共に同じ時間を過ごし、一緒にいて楽しいと感じたら、それはもうすでに「ベストフレンド」なのである。

ハムカ大学の学生たちは、私たちを共に楽しい時間を過ごす「ベストフレンド」として接してくれた。分け隔てなく私たちを受け入れてくれるからこそ、国を越えても「ベストフレンド」であり続けられるのだと思う。

3. さいごに

インドネシアプログラムに参加して学んだことは、「出会い」がいかにかけがえのないものであるかということだ。インドネシアに行っていなかったら、ハムカ大学の人々や現地の人々に出会えることはなかったし、彼らの「あたたかさ」に触れることはなかった。このプログラムに参加していなかったら、こうして自分の思いや気づきを共有できる日本のメンバーにも出会えていなかったかもしれない。そう考えると、人と人との出会いの中で、私はいろいろなことを学んでいるのだなあと思ってしまうのである。それから、この出会いを大事にしたいと強く思う。国を越えて「ベストフレンド」だと言ってくれる人たちがいるのは本当に心強い。次インドネシアに行く時、帰れる家があることは本当に嬉しい。ハムカ大学の皆さんや、ホームステイでお世話になったホストファミリーの皆さん、現地で出会った皆さん、皆さんの優しさや愛情があったからこそ、とても充実したインドネシアでの生活を送ることが出来た。本当にありがとうございました。

そして21歳の誕生日をインドネシアで迎えることが出来たのも、何かの「出会い」だと思う。この場を借りてもう一度お祝いをしてくださった皆さんにお礼が言いたい。すばらしい時間を本当にありがとうございました。

この経験が、これからの人生にどのように関わってくるかは分からないけど、この経験で学んだこと・感じたことはしっかりと胸に刻み、これからにつなげていきたい。

「まず人を頼る」生き方

地域学部3年

はじめに

私はインドネシアで、何度も自分の知らない内なる自分に出会った。ムワッと湿気を持った熱気に包まれ、たくさんのバイクや車が溢れるジャカルタ空港に着いてから、穏やかな気候でどこか閑散としている鳥取空港に帰ってくるまでの間に、私は何度インドネシアと日本との文化の違いに驚き、葛藤し、感動しただろうか。その驚きや葛藤、感動のひとつひとつが、自分の知らない自分

身への気づきであった。そして同時に、自分が生きてきた社会、鳥取や日本、広くいえば先進国やアジアといった世界について考えるきっかけともなった。短期間のプログラムではあったが、私たちはハムカ大学の学生や教員の方々、ホームステイの家族、カンブンナガやカンブンバンダンの人々など数えきれないほどの人に出会い、彼らのふるまい、考え、生活を近くで感じながら過ごすことができた。私はインドネシアの人々の陽気で優しい人間性だけでなく、彼らの生活習慣、自然な振る舞いに魅力を感じた。インドネシアでは携帯やパソコン、辞書を開くよりも先に人に疑問をぶつける。その何気ない振る舞いから、私は生き方のヒントを得たと考えている。このレポートでは、インドネシアで得た自分や社会への気づきとともに、インドネシアで出会った人の振る舞いから感じた、現代の社会で忘れられがちな、人が人を頼って生きることについて述べたい。

1. 違いとはなにか

プログラムを終えてみて、国と国の「違い」を見て初めて、他国のことでも他人事ではないと知るのだと思った。この世に自分に関係のないことなんてないのかもしれないということに気づかされた。この章では「違い」についての気づきに関する体験をいくつか挙げる。

1.1 カンブンナガでの気づき——生活の違いと生きる社会の違い

お風呂から分かるあたりまえ

自分の生活習慣とは異なる様式から、自分の生活を振り返り、違いについて考えさせられたのがカンブンナガでの体験であった。先に述べたように、カンブンナガは電気やガスを使うことを拒否し、現在もインドネシアの伝統的な暮らしを続けている村である。村は山々に囲まれた盆地にあり、私たちは長い階段を下りて村に入った。緑が美しい田んぼを抜けると住居やモスク、集会所などが立ち並んでいて、鶏や猫があたりまえのように歩き回っている。特徴的なのがトイレとお風呂の様式で、コンクリート、もしくは木で四方を囲まれた小屋のようなものが大きな池の上にくつも建てられていてそこでお風呂もトイレも済ます。このお風呂兼トイレについて私は事前には知らないながらも、実際には戸惑った。タオルや着替えはどこに置けばいいのか、下の池には魚もいるがシャンプーを使ってもいいのか、どう考えても囲いの壁は低いが村の人たちは他の人に裸を見られても気にならないのかなど、お風呂だけでも疑問が絶えなかった。しかしそんな簡単なことにさえ戸惑い、悩んでいる自分がどこかおもしろかった。

今までお風呂の使い方を教えられた記憶はなかったが、そのような当たり前動作に疑問を持つこと自体が新鮮だった。一方、私たちがお世話になったハムカ大学の学生たちも、このお風呂の様相には戸惑っていた。彼女たちの入浴中に池の前を通った時、低すぎるコンクリートの壁から彼女たちの顔が見えていて目があった。「キャー」と楽しそうにはしゃいでいたが、後から「ここは、普通ではないですから、恥ずかしいね」と言っていた。確かに、カンブンナガへ来る前に宿泊したジャカルタのホテルではお湯が出るシャワーがあり、ホームステイの家にも水道があった。お風呂だけではなく、インドネシアの暮らしには電気もガスも水道もそこにあるのが標準的になりつつあり、エアコンやテレビもある家庭は増えていて、カンブンナガの生活はハムカの学生たちにとっても当たり前のもではなかった。その事実が私にとって大きな驚きの一つであった。

想像できる生活とできない生活

ハムカ大学の学生にとってもカンブンナガ村の暮らしが新鮮で慣れないものだと気づいた時、私

が享受してきた生活もまた日本の生活の一つの側面でしかないのだと思った。私の思い描く生活習慣には、普通に電気や水道、屋根や壁が整っている家が前提としてあった。しかし、日本でもこのような環境が普通ではない人は多く存在する。今まで、私は実際に大阪や東京、地元である兵庫県でも路上生活者を目にしたことがあるが、同じ国内にいる彼らと私の生活は明らかに違っている。私は日本国内の路上生活者の人々よりも、ハムカ大学の学生たちの方が私と「違わない」のではないかと思った。ハムカの学生たちとのコミュニケーションから、彼らは日ごろ大学で勉強し、友達とご飯を食べに行ったり、写真を撮ったり、歌を歌ったりしていることが伺えた。SNSを使って連絡をとったり、ゲームをしたりする様子が目に見えて想像できるハムカの学生たちの暮らしに比べて、日本の路上生活者の暮らしについて私が想像できることは驚くほど少ないと気付いた。インドネシアでハムカの学生やホームステイの家族と過ごすほど、インドネシアの人々は当初自分が考えていた「他者」という存在よりも身近に感じた。それは、私に性格や容姿が似ているということではなくて、電気や水道はもちろん歌や漫画などの情報やそれらを得る携帯やパソコン、テレビが日常にある生活環境が似ているということだ。

似ているが、違う人々

ハムカの学生は私と同じようにカンブンナガのお風呂の様子に戸惑っていたが、カンブンナガ滞在中お世話になったパパ（インドネシア語でお父さん）の家ではとても自然にくつろいでいたことが印象的だった。私はパパの家で出されたご飯に手をだすのを最初はなんとなく躊躇していた。他人の家、しかも初対面の方の家で緊張していたし、他人の家でたくさん料理を食べることが私にとって恥ずかしいことのように感じたからだ。しかしハムカの学生や先生は自分の家かのようにみんなにお茶を注ぎ、料理をとりわけていた。彼女らが料理を作ってくれたイブ（インドネシア語でお母さん）にお礼を言いながら、パクパク食べる様子に背中を押されて、私もおいしく料理を頂いた。ハムカの学生たちは食事の後には床に寝転がったりして、彼女らの様子は他人の家にきているとは思えないくらいリラックスしていたように思う。人の好意を感謝しながら、自然な態度で受け取ることのできるインドネシアの人々は素直に人に甘えることができない自分とは違っていた。

みんなが生きていける社会

インドネシア国内でも生活の水準は上がり、経済格差は広がっている。とはいえ、カンブンナガの村は近代化の波に対抗する村ではなく、社会に寄り添い共存している村のように思った。たしかに村には電気やガスといった文明的な利便性は取り入れられていなかった。しかし、村で作った有機栽培のお米を村で消費するだけでなく、これからはオーガニックという強みを生かして村の外へ販売していく。村は国からも「オーガニック村」として認められているようだ。カンブンナガ村は社会から独立しているわけでも、取り残されているわけでもなく、村の人々が伝統的な暮らしを続けていくための方法を見出しているのだと思った。ハムカの学生にとって、また多くのインドネシアの人々にとってカンブンナガの生活は普通、標準の状態ではなかったが、それは「貧しさ」とはほど遠いものだった。村の決まりごとは時代とともに少しずつ変化しているらしい。しかし私はカンブンナガでは村が物質的、金銭的に「豊か」になるために電気やガスを使うことはないのではないかと考えている。なぜなら、そういった「豊かさ」がなくても生きていけるセーフティネットのようなものがカンブンナガにはあったからだ。パパは町に出稼ぎに行ったことがあり、電気やガス

を「知らない」わけではなかった。しかし、電気やガスを使えないことを不満と思っていなかった。それは火事から村や家族を守るためであった。こうもおっしゃっていた。「カンブンナガではもしお葬式を挙げるときに自分の家にお金がなくても隣の家の人や村の人々がそれぞれお金や食べ物を持ち寄って、助けてくれる。...この村には108の家がありますが、村に暮らす人はみな家族なのです。...みなさんはこの村に来てくれましたから、みなさんも家族です。」と。私はインドネシアの滞在中、カンブンナガ、ひいてはインドネシアで「貧しさ」や「辛さ」を感じたことはなかった。それは何故かと考えたときこのパパの言葉やハムカの学生たちの過ごし方にヒントがあると思う。

カンブンナガの生活とハムカ大学の学生たちの普段の暮らしは違っていた。しかし、他者との接し方はみな共通していたと思う。人に変な遠慮をせずに素直に感謝し受け入れることや、相手の考えを過度に推測したりせずに自然に動くことができる。インドネシアは文明の力に極力頼らず柔軟に、人と人の力で生きていける社会なのではないかと思った。インドネシアでは日本のようにお金がないことで人がコミュニティや住む場所から追い出されるということはない。なぜなら「家族」が助けてくれるからだ。私にとっての家族とは、血縁や特別な条件のあるもので、「ここからここまで」とはっきり線が引ける「定義」のようなものだった。しかし、インドネシアの人々にとっての「家族」とはその場その場で変化するアメーバのようなもので、困った人がいたら助けるという当たり前のことが自然にできる、臨機応変なシステムだった。このインドネシアの「家族」というシステムのある社会と、日本の文明的な利便性はあっても人に素直に接することのできない社会とは、どちらが本当に生きやすいだろうかと考え、私はインドネシアのような社会で生きたいと思った。

1.2 イメージへの気づき——価値観の違いは伝え方の違い

私に優しい人たち

インドネシアの人々はとても優しくかった。それは、なぜこんなにも優しくしてくれるのかと戸惑うほどだった。イスラムの宗教学校を訪れた際、自己紹介をする私たちに向かって生徒たちは大きな拍手をくれた。それだけでなく、名前を呼んでくれたり、「かわいい」「こんにちは」と声をかけてくれたり、部屋いっぱい響くほどの反応をくれた。自己紹介が終わると一斉に生徒たちが集まってきて、「サリム」という年上の人の手の甲に自分の額をつけるあいさつをしてくれた。ある女子生徒は、「あなたにお土産があるのですが、いいですか?」と、私に話しかけてきてくれて、彼女が普段使っているヒジャブをくれた。

インドネシアの人々は普段から人と人との距離が近い。手をつないだり、腕を組んだり、ハグをしたり、サリムというあいさつ一つをとっても人の肌に触れるコミュニケーションが普通だった。しかし、なぜここまで私たち日本人が歓迎され、みな優しくしてくれるのだろうかと感動する反面、戸惑い、疑問に思った。そしてそれはインドネシアの人々の、日本へのイメージが関係しているのではないかと思った。

インドネシアの人々の日本イメージ

ハムカの学生たちはとても日本に好意的だった。もちろん彼らが日本語学科の生徒であったことも関係していると思う。しかし、彼らは日本の音楽や漫画、文化に詳しいだけではなく、本当に日本のことや日本人のことが好きだった。女子学生からは「日本人は綺麗だね」とよく言われた。なぜかと聞くと「肌が白いからです」と答えた。また、ある学生が「私は日本人～」と言うとそれに対して別の学生が「あ～○○さん綺麗!」という冗談で笑い合っていた。日本でも、欧米人への憧れ

のようなものがあるが、インドネシアの人にとって、日本人はちょっとした憧れの対象なのかもしれないと知った。

プログラム最終日、デスビアン先生のお子さんと家の外の町を歩いている時に印象的だったことがある。町を歩いている間、近所を歩く人々に、デスビアン先生のお子さんは「AKB48!」と嬉しそうに声をかけていた。また AKB48 の「ヘビーローテーション」という曲のサビを口ずさんだりしていた。私は彼女が AKB48 のファンなのだろうとその時は単純に考えていた。しかしもしかすると彼女にとって私たちと町を歩いているということが、一つの自慢できることだったのかもしれない。彼女らにとっての日本のイメージについて考えるとき、ふとガルットで聞いたアイム先生のお父さんのお話を思い出した。

伝える人の思い

アイム先生のお父さんには、戦時中インドネシアが日本の植民地だった頃のお話を伺った。当時小学生だったお父さんは日本軍から戦い方や日本の文化を学んだそうだ。勉強の時に何度も言われた「馬鹿野郎」という言葉や、君が代の歌はいまだに覚えておられて、植民地教育の厳しさを知った。しかし、お父さんの話には植民地の時代の苦しさよりも植民地であった時代があったからこそインドネシアの独立や現在のインドネシアの成長があるのだというポジティブな話が多かったように思う。インドネシアは 365 年のオランダ統治の後、3 年半の日本による支配を経て独立した。お父さんが言うには、日本の軍事教育がインドネシアの独立のために結果的に役立ったということだった。お父さんは「私はお礼を言いたい。…あなたたちはもう家族だから」とおっしゃった。過去の日本の過ちを責めることをせず、しかも感謝を伝えるお父さんの考えや、思いは私の想像も及ばない次元だった。なぜ自分の国を占拠していた日本に感謝の思いを口にでき、なぜ私たちを「家族」と呼べるのか。お父さんの寛大さに、強い葛藤を抱いた。しかし、ただお父さんが未来の平和を願い、平和のために意味のあることをしているのだということは分かった。

伝える人、伝え方の違いが世界を変える

私が出会ったインドネシアの人々がなぜ、私たち日本人をこんなにも優しく迎えてくれ、日本を好意的に思ってくれるのか。理由の一つとして情報通信の発達が考えられる。現在の社会は電子メディアやマスメディアによって、行ったことのない国の情報が手に入りやすい。しかし、そういった電子メディアやマスメディアだけではなく、これまでにインドネシアの歴史を伝えてきた身近な「人」の考えや伝え方が大きく関係しているのではないかと思う。

いまだに戦時中のしがらみが国際関係に影響している国は多い。日本でも戦争を知っている世代の外国人への偏見、差別は依然としてある。そしてその偏見や差別は私の世代にも引き継がれているように感じる。実際に戦争を体験した人が事実をいかに次の世代に伝えるかが、その後の国の在り方に関係するのだ。

私たちがお父さんの話を聞いている時、その場には私たち以外にもハムカの学生がいて、アイム先生の家族がいた。お父さんは日本人である私たちに植民地時代の自分の記憶を伝えるだけでなく、同時に自分よりも若い世代にも自国の歴史を伝えていた。アイム先生の家には富士山の掛け軸や、日本の人形などが飾られていて、お父さんはこれまでも、家族やこの家を訪れる人に戦時中の話を伝えてきたのだろうなと思った。植民地という日本の過ちを伝えるだけでなく、私たちを「家族」と受け入れてくれるお父さんの姿が、私に優しくしてくれる多くのインドネシアの人々の姿に重な

った。歴史を伝えてくれる人の姿勢が、現在のインドネシアの人々に反映されているのではないかと思った。

アイム先生のお父さん以外に、戦争を体験したインドネシアの方の話を伺ったことはない。もしかしたら、日本の植民地時代の教育が、お父さんに日本への好意的なイメージを植え付けているのかもしれない。しかし、私はお父さんの寛大な心と、それを若い世代に伝える姿勢が平和への一つの答えなのではないかと思った。自分の体験や考えを誰かに伝えることが他者の視点、価値観に与える影響は確かにある。アイム先生のお父さんが身近な人に自分の経験を話してきたからこそ、私達はお父さんの話を伺うことができたのだと思う。インドネシアの人全員が日本人に好意的であるかは分からないが、お父さんの息子であるアイム先生やその友人であるアクバル先生、ハムカの方々といった日本に好意的な方々を通じた結果、私たちはアイム先生の家を訪問できたのではないだろうか。こうやって世界は作られ、つながり、変わっていくのかもしれないと思ったとき、私はもっと自分のインドネシアでの体験や、授業で学んださまざまなことを誰かに共有したいと思った。自分が誰かに話すことから、世界が変えられるような気がした。

2. まず人に頼る

2.1 建物の距離は心の距離

私はインドネシアで自分とは違う社会に生きている人々に出会った。ハムカの学生やキャンプナガの人々、キャンパンバンダン、アイム先生のお父さんやレリー先生の家での思い出はまだ山ほどある。しかし10日間を通して一番感じたインドネシアと日本との違いは、人と人との距離だった。日本に帰国し、鳥取空港の外に出た自分の頭には「スカスカ」という言葉が最初に浮かんだ。そして、一人自分のアパートに戻り自分の部屋から鳥取の町を眺め、改めて「日本は人と人も、車と車も建物同士でさえもはっきりと離れている」ということにどうしても違和感を感じた。その町の様子に自分を受け入れてくれない、馴染ませてくれないような静けさと寂しさを感じて涙が出た。インドネシアの住宅街は家と家がどこまで一つの家なのか分からないくらいに折り重なり、連なり、寄りかかっていた。隣の家の人の物音が意図せず聞こえてくるような人と人が密接な暮らしが想像できた。一つ一つの家が分かれていて独立していないように見えたその町の様子と、インドネシアの人と人との関係性は似ていると思う。

2.2 「頼らなくてもいい」が「頼れない」へ

キャンプナガでは、調味料を貸し借りしたり、みんなで食べ物を持ち寄ったりと言うことが当たり前だった。一方日本で私たちがいざ自分に足りない、必要なものを求めるときにはどうするかと考えたとき、お金を出して買うしか選択肢はないように思う。服や、身の回りの生活用品をそろえるにしてもお店で買い、古くなったら捨てるか売るのが当たり前だ。まして、今ではインターネットを使えば自分に必要なものを売ってくれる人の顔を見る必要さえない。品物を求めて町を歩くことさえも少なくなっている。私は自分がいつのまにかお金や新しい技術を使って生活することが得意になっていたことに気づいた。そして社会全体が同じようになるべく自分が動かず、直接他人の顔を見ることなく、サービスやテクノロジーを頼りに余分なお金を払って生きるようになっているのではないかと思った。さまざまな情報や知識が携帯さえあればすぐに手に入ってしまう感覚に慣れている私たちは日常的誰かに頼るといふ選択肢を忘れがちなのかもしれない。それがいつの間にか人に「頼れない」人間を育てているのではないだろうか。

2.3 ハムカ流「人の頼り方」

ハムカの学生たちは、自分の好きな日本の文化、アニメなら「けいおんは知ってる？」と聞いて来たり、歌手なら「YUIの『東京』めっちゃ好き！」と歌ってくれたり、自分の好きなものや興味のあることを教えてくれる。初対面の人同士が自己紹介をするのは自然なことだが、彼らは話したり、歌ったり自分のプライベートな部分や関心をすすんで他人にさらけだしてくれた。他人に自分を分かってもらうためにはまず自分から心を開いていくことが手っ取り早い。ハムカのみん中は相手に関心を持ち、理解しようとするのはもちろん、まず自分を知ってもらうことが仲良くなるために一番効率のいいことだと自然に分かっているのだと思う。そうして自分や相手をよりよく理解することで、互いに頼り頼られる関係ができる。インドネシアの人々が人に甘えたり、他人を巻き込んでみんなで楽しめるのは、人と人が協調して生きていく必要性を知っているからだと思う。

ハムカの学生は私と会話をするとき、分からない日本語があっても辞書や携帯で調べるよりも早く隣の友人に尋ね、もし友人が分からなかったら別の友人に尋ねる。その様子は焦っているようで、なんだか楽しそうだった。

日本語の授業を見学した際、1年生に授業をしているのは先輩である卒業生だった。先輩と後輩、同級生同士でも教え合うことが当たり前で、とても仲が良い。先生同士も互いにアドバイス、フォローをしたりしていた。また、ハムカ大学の日本語学科の先生には卒業生が多く、先生と生徒の距離が驚くほど近い。「先生イケメン！」と女子学生が先生をからかったり、反対に先生が「〇〇さんは、〇〇さんの元彼です」と生徒の恋愛事情を暴露するなど、友達のような親しさがあった。学習の面でも生活の面でも、ハムカの人々は人と人が寄り添って見えた。

私は、自分の知りたいこと、今日の天気や本や映画、あらゆることをインターネットで調べることがもはや習慣となっていた。みんなで知識を共有し、情報を交換することがどんな教材を使った学習よりも力になることだということとは頭で分かっているけど、それができない私は改めてハムカの人々をうらやましく思った。彼らはバラバラなようで全体で一つであり、ハムカ大学の日本語学科で勉強することは、みんなで学び、同時に信頼関係を築くことなのだと思う。

おわりに

インドネシアの人々は「私達はベストフレンド」、「私達は家族ですから」と何度も言ってくれた。日本に帰ってきてからというもの自分はずっと彼らにとっての「家族」という言葉の意味を探していた。今思えば、その言葉は「(私たちはベストフレンド、家族なのだから)もっと頼りなさい。遠慮はいらないよ」という意味だったのかなと思う。インドネシアの人々だって、誰にでも素直に甘えられるわけではないかもしれないし、ありのままの自分でいられない状況があるかもしれない。しかし、私が出会ったカンブンナガの村や、AIM先生家族、ホームステイの家族、ハムカ大学の人々はそれぞれが輝いていて、人と人が親密だった。これは、それぞれの人が時間をかけて築かれたインドネシアという確かなコミュニティの一員だからだ。私はその目に見えない、多様なコミュニティに飛び込んだのだと思う。そしてそのコミュニティは不器用な日本人が飛び込んでも、動じない寛大さとあたたかみを持って、私を仲間に入れてくれたように思う。10日という短期間でインドネシアの人々とあんなにも笑い、抱き合うような関係になれたのはインドネシアの人々の築いたコミュニティのすごさだと思う。ハムカの学生とは今もSNSを通じて何気ない会話を交わしたり、悩み事を相談したりといったお互いを頼る関係が続いているが、日本にいるからこそ、誰かを

気軽に頼ることのできる関係性の貴重さや心地よさを実感する。

インドネシアでは路上の屋台を始め、多くの人が顔を合わさずにはいられなかった。インドネシアに行って初めて、自分が人を介さずにモノや情報を手に入れることができ、人と触れ合うことを必要としないテクノロジーが当たり前になっていく世界に生きているのだと実感した。そしてインドネシアの社会もまた変化していきだろうということに気づいて不安に思った。私は疑問を持たずすぐに友達に聞いたり、疲れば隣の人の肩にもたれかかったりできる人々の関係性が素晴らしく、心地よかった。偉そうに言うわけではなく、インドネシアの人々には、携帯やパソコン、テレビよりも自分たちが気軽に頼れる「人」に恵まれていることを忘れないでほしいと思う。

インドネシアで出会えた人々には本当に感謝している。インドネシアの気候や食べ物、みんなで過ごしたバスの中のカオスな空間が懐かしい。おそらく私はこれからの人生の大半を日本で過ごす。だからこそ日本に自分の居場所をつくり、自分が属するコミュニティやひいては世界をよりよくしていきたい。そのためにはアイム先生のお父さんのように自分が学んだことを伝え続けなければならないし、ハムカの人々のようにみんなで学び合っていく仲間を大切にしたいと思う。

私のホーム 地域学部4年生

はじめに

私はインドネシアプログラムに参加するのは今回で二回目である。二回目だからといってつまらないということはもちろんなかった。一回目も二回目も最高の思い出ができた。一回目に行った時からそうであったが、インドネシアは孤独や寂しさを感じさせない場所である。私はこれまで外国に行けば、その国での生活がいくら楽しくても、日本を恋しく思っていた。しかし、インドネシアでは初めてホームシックにならなかった。きっとインドネシアは私にとって日本よりもホームなのである。帰る家があって、家族や友達がいるが、それでもインドネシアの方がホームだと感じたのである。日本の生活を忘れさせるほどの魅力があるのだ。それほど、インドネシアプログラムは充実したものだ。毎日が楽しくて、幸せだった。

インドネシアでの充実した日々を振り返り、以下に感想をまとめたいと思う。まとめるうえで、インドネシアで感じた三つの力についてわけ、感想を述べたいと思う。それぞれの力のなかでも、小見出しをつけ、プログラム中のエピソードを交えながら述べていきたいと思う。そして、なぜ私がインドネシアがホームだと感じたのかということも加えて述べたいと思う。

1. 自分らしく振舞う力——彼らの距離の取り方

1.1 体温を感じる距離の近さ

ハムカ大学の人たちは体温を感じる距離の近さがある。ハムカ大学の人達同士の距離が近いだけでなく、私達とも距離が近い。私たち日本人はスキンシップをとることはあまりしないし、他の外国と比べても人と人との距離が近いとはいえないだろう。むしろ、距離が近すぎると、「セクハラである」など敏感に反応したりする傾向がある。私も日本では、「人と人の距離が近すぎると変に思われないだろうか」「気持ちが悪く思われないだろうか」などの心配をしまい、意識して一定の距離を保とうとする。また、大人であればあまえていけないような気持ちにもさせられる。しかし、インドネシアにくると、安心してスキンシップをとったり、甘えたりすることができるのであ

る。インドネシアでは嫌われないだろうかなどの余計な心配をしなくてもいい。大人だから、男同士だからくっついてはいけないなどの暗黙のルールも存在していない。実際、ハムカ大学の日本語学科の女性の先生が「眠たい」と言いながら、私の肩にもたれることもあった。誰もが甘えても良い状態、甘えることのできる距離があるのである。このようになんの気兼ねもなく体がふれあうことに私はすごく安心した。

この他にも、距離の近さを実感したエピソードを紹介したい。私たちはプログラム中、ガルットにあるゲストハウスに宿泊した。ガルットは、涼しく、特に夜は気温が低く、寒くなる地域である。ガルットのゲストハウスに鳥取大学の学生とハムカ大学の学生、ハムカ大学の先生が15名程度宿泊した。毛布は人数分足りず、私は夜中寒くて目が覚めてしまい、隣のハムカの学生にくっついた。そうすると、その学生は、ぐいぐいと私の体を自分に引き寄せ、毛布をしっかりとかけてくれた。そして、なぜか、その学生の隣の学生（私から見ると、隣の隣の学生）までも手をぐっと伸ばし、毛布からはみ出さないよう、私の体を抱き寄せてくれたのである。この時私は、温かさや幸せな気持ちに包まれてすぐに寝ることができた。彼女たちは夜中だったので、寝ぼけた状態でこのようなことをしてくれたのだと思う。彼女たちは気遣いをしてくれたというよりも、ごく自然にしてくれたことなのであろう。そのように思うとさらに嬉しくなった。

このような人と人の近さは、ハムカの人たちにとってはごく自然なことだと思うが、私にとっては涙が出るほど嬉しいことであった。包み込まれているような安心感を与えてもらった。上で一度述べたが、日本で私は、人と関わる時、身構えてしまったり、過剰に気にしたりと、人とは一定の距離を保っていると思う。それは、一定の距離をとって相手に嫌われないように、自分が傷つかないように予防しているのである。しかし、インドネシアでは、身構える間もなくずっと私の心のなかに入ってくる。余計なことを考える時間を与えないほどあつという間に体温を感じることで近さの距離になるため、着飾る暇もない。また、距離が近い故に嘘もごまかしも見破られるような感覚をもった。たとえ言語が通じなくても、体温や表情の変化などを近くで感じるができるし、感じとってくれる。身構える間がなく、隠しことができない距離の近さがあるからこそ、私は「素」の自分でいれる、「ここ（インドネシア）では安心してのびのびと自分らしく振舞える」と確信した。

1.2 みんなと距離が近い

インドネシアのように人との距離が近い関係は、日本にも、もちろんある。しかしそれは家族や恋人同士、親しい友人など限られた関係だと思う。しかし、ハムカの人たちは、家族や恋人関係に限らず、友人関係や同僚関係のなかにも距離の近い関係をもっている。一方日本は、親密な人間関係は限られており、家族や彼女・彼氏、親しい友人などとの関係が切れると一気に一人ぼっちになるイメージがある。それだけ一定の人に依存している傾向がある。

インドネシアには多くの人と関係があり、どこかが切れることがあっても問題にならないように感じた。目に見えるものではないが、インドネシアには無数のたしかな近い関係・つながりがあると思う。距離の近い関係を多くもつことができるインドネシアでは一定の人に依存する必要がなく、一人ぼっちになるという恐れや不安をもっていないように感じた。関係がきれないよう、必死に繋ぎとめようと相手に過剰に気を遣ったり、相手の顔色をうかがうことはしていないだろう。インドネシアではみんなとの距離が近いからこそ、着飾らず、媚を売らず、「素」の自分を出すことができるのだと思った。

1.3 気さくさと敬意の両方をもつ

みんなと距離が近いからといって、ただ気さくだということだけでない。彼らは気さくでかつ、他者に対する敬意をしっかりとっているのである。私がホームステイさせてもらっていた日本学科のリナ先生が家に帰ろうと一階へ向かう階段を下りていると、二階にいた学生が「先生、お帰りですか？」と訊ね、階段を走って降りてきた。自分の顔を先生の手甲に触れさせ、挨拶をしていた。わざわざ挨拶をしにいらしていると感じた。

ハムカ大学の教師と学生の距離は本当に近く、ひとつの大きな家族のようであるが、親しいからといって教師と学生の関係が曖昧になってしまうのではなく、そこははっきりと分かれている。気さくさはもちつつも、お互いの関係はわかまえているところが素晴らしいと思った。関係をわかまえることを意識すれば、緊張して距離は遠いままになったり、親しい関係になると敬意を表すことがおろそかになってしまいがちである。しかし、ハムカ大学は気さくさと敬意をもつこと、その両方を兼ねそろえており、彼らの振る舞いにどんどん惹かれていった。私もあのように振舞えたらなと羨ましく思った。

2. 諦める力・受け入れる力——彼らのもつおおらかさ

2.1 アイム先生のお父さんのお話

アイム先生のお父さんからのお話を聞くのは2回目だった。お父さんは日本の植民地時代をこどもの時に経験され、小学校二年頃まで日本語の勉強をされていたようである。私は植民地をしていた日本人の子孫ということ意識してお父さんと出会った。お父さんは「日本人が来たからオランダからの植民地が終わった。だから（日本のしてきたことは）ありがたい。」「日本人のおかげでインドネシア軍は強くなった」と話された。お父さんは私たちのことを「お父さんにとって子どもだ。」とまで話された。私達日本人は、過去にインドネシアの人びとを苦しめてきたはずなのに、お父さんは私達や私達の先祖を責めるどころか、感謝しておられ、「植民地をしていた日本人の子孫」としての私はとしてではなく、家族の一人として迎えてくれた。そのことに戸惑いを感じる一方で、包まれているような安心感があったことは確かである。過去のことも含めて私達を迎い入れてくださったのである。お父さんの柔らかない笑顔を見て、目の前のお父さんにどのようなお返しができるのか、私はインドネシアとどのような関わりをもっていくことができるのか、ということ深く考えさせられたと同時に、今を生きる日本人としてどのような生き方ができるのか問われていると思った。受け入れてもらったからこそその責任感・覚悟が芽生えた。

2.2 嫌なことがあっても楽しめる

私はハムカの学生に「お祈り大変じゃない?」「村で生理の時はトイレが大変じゃない?」などのことを聞いた。私にとって不便だと思えることが多いからである。しかし、彼、彼女たちの返答は決まって「仕方ないですから。」や「義務ですから。」だった。インドネシアでは決まりごとに対して、不満をもっておらず、受け入れているのであった。日本では、決まりごとや面倒なことに対して、強制させられている、または守らされていると感じていると思う。そして、私たちはそれらの決まりごとに対し、不満を言ったり、嫌々こなしてしまうことが多々あるだろう。しかし、インドネシアの人たちはあっさりと、受け入れることができているようである。何かしら問題のある状況を目の前にして、彼らはその状況に不満を言うのではなく、「その状態だから仕方ないのだ」と諦め

る力をもっている。これはイスラム教のルールに対して「仕方ないですから」と受け入れていることに通じているものがあると思う。

このような諦める力や受け入れる力があるためか、かれらは誰かを攻め立てるような発想をあまりもっていないようである。環境や物や人などあらゆるものの欠点を指摘し、どうこうしようとするのではなく、諦め、受け入れている。道路に大きな穴があいていて、車体が大きな音をたてて擦れてしまった時も、車内のインドネシアの皆さんは爆笑だった。穴と日本語教育学科の先生であるアナ先生の発音が同じで、穴のある道があると、「アナ先生」と言って爆笑しているのがであった。日本だったら、「何であんなところに穴があるんだ！」と怒る人もいるだろうし、「道路工事をしろ！」と思う人もいるだろう。しかし、インドネシアでは、それらのことを笑い飛ばしている。寛大でおおらかなのである。きっと道路が悪いことは誰にとっても良いことではないけれど、彼らは悪い状況を受け入れ、その状況を楽しみ、笑いに変えることができるのである。

私は彼らのもっているような諦める力・受け入れる力をインドネシア以外でも感じられた場所があった。それは、それは大阪、西成区、通常釜ヶ崎と呼ばれている地域である。私がインドネシアのほかに居心地が良いと感じたもう一つの場所である。今回は釜ヶ崎についての説明は省略させてもらうが、その地域で生活している人びとから、上で述べてきたような力を感じた。釜ヶ崎で暮らす人びとは様々な事情を抱えており、トラブルに巻き込まれて借金を背負わされてしまった人、家族をおいて逃げてきた人、野宿者などがその地域で暮らしている。釜ヶ崎の人びとは自分たちが置かれている状況を諦めているのである。なんでこうなってしまったんだ？なんで俺だけがこんな思いをしているのか？などの言葉を聞いたことはこれまで一度もなく、「わしの人生はこんなもん」などというように、人のせいにするわけではなく、自分の人生を受け入れているようであった。

釜ヶ崎で暮らす人びとに対して、悲観的になっているや人生を諦めているのはどうなのかという意見もあると思うが、私はもし自分が釜ヶ崎で暮らす人びとを同じような状況になった時、彼らのようにその状況を受け入れ生きていけるかと思ったら、私には難しいと思った。誰かのせいにしたたり、その状況をいつまでも否定し続けていると思う。釜ヶ崎の人びとには受け入れる力、強さがあると思った。それは、インドネシアの人びとの力と似ており、自分の置かれた状況を受け入れ、あるがままの自分と向き合える強さをもっているのだと思った。

3. 共存する力——除け者をつくらない

3.1 個人個人ではなく、みんなで一緒に

私はプログラム中、リナ先生の家にもホームステイさせてもらっており、お宅が大学から離れた場所にあったため、旦那さんが私たちを送り迎えしてくださっていた。大学で学生同士のワークショップがあった日の朝も、旦那さんに送っていただいた。朝が早かったため、大学近くの屋台でお粥を買って、大学のなかの空き教室で食べた。私たち学生とリナ先生だけではなく、旦那さんも一緒だった。みんなで朝ごはんを食べるといふ何気ないことでも私はとても嬉しかった。私の父を想像した際、送り迎えしたら、そのまま車から降りることなく家へ帰っていくと思う。それは恥ずかしいという気持ちもあるだろうし、私たちに気を遣ったうえでの行為だと思う。よくよく考えれば、わざわざ家に帰ってひとりでご飯を食べなくても、皆で食べればいいのである。しかし、単純と思えることすらできないほど、私たちは気を遣いすぎて、みんなで何かすることが苦手になっているのである。

ワークショップで私たちは1人でいることを好む日本人について発表した。私たちは大学生にな

ると、1人暮らしを始める人が多いためか、1人でご飯を食べる時間、1人で家でくつろぐ時間などが増えている。私たちがハムカの学生に、「みんなと一緒にいて疲れることはないか」「ひとりでいたいと思う時はないか」と聞いたところ、「皆でいると楽しい、疲れない、1人でいたいと思わない」と即答だった。この返答からも、インドネシアではみんなで何かすることが当たり前にあるということが分かった。

3.2 みんなベストフレンド

プログラム中、よくハムカの学生が言っていた言葉に「ベストフレンド」がある。私は普段「ベストフレンド」という言葉やそれに代わる日本語を使うことはほとんどない。なぜなら、私にとって「ベストフレンド」や「親友」とは多くの人に使う言葉ではなく、限られた友達に使う言葉と認識していたからである。そして、私たち日本人が「親友」という言葉を使うときは、「親友だよ」とお互いの関係を確かめあったり、あやふやな関係を繋ごうとするようなニュアンスを含んでいることがあると思う。一方インドネシアの人たちの言う「ベストフレンド」は関係を確かめるための言葉ではない。彼らは私たちと初めて会った日にすでに「ベストフレンド」だという。「ベストフレンド」って言っているの？とこちらの方が戸惑ってしまうほどである。しかし、彼らは上辺だけで「ベストフレンド」と言っているのではなく、知り合った期間は短いだろうが長いだろうが関係なく、すべてベストフレンドなのである。例えば、「顔見知り程度」、「ふつうの友達」、「何でも話せる親友」などのように順位付けやグループ分けがあるわけではない。

私たちは、親友とは？ベストフレンドとは？などと、それらのなかに含まれるのは誰なのかということ考える。その行為こそ、自分が友達だと思っている人びとをふるいにかけ、それぞれがもつ親友やベストフレンドの条件に合う人を選別しているのである。そして、日本ではハムカ大学でみられたような多人数でつるむ光景はほとんどなく、2~3人の少人数でつるんでいることが多い。そして、私たち、若い世代はそれらの少人数のグループに名前をつけるのである。例えば、「いつメン」などである。「いつメン」とはいつも一緒にいるメンバーという意味をからきている。考えてみれば、「いつメン」のような名前をつける必要ないのである。しかし、私たちは自分たちの仲良しだと考えるグループに名前をつけたがる。それは、先ほど述べたように、お互いの関係を確かめるためである。そして、いつメンなどあるグループに属することで、互いの関係を確かめ合うだけでなく、自分の存在を確立させたいという思いや、自分を守りたいという思いがあるのだと思う。私たちにとってベストフレンドや「いつメン」などには、自分を守るために必要不可欠なものであるようだ。

以上のような背景があるため、私はハムカの学生の使う「ベストフレンド」という言葉に敏感になってしまったのである。ベストフレンドをつくることによって、自分を守っている私たちにとって、彼らが頻繁にベストフレンドということに対して、戸惑いを感じたのである。しかし、彼らが順位やグループ分けをすることがなく、除け者をつくらうとしていないことが伝わってくるため、自分を守るためなどの駆け引きなく彼らと接することができた。ベストフレンドということ言葉が、自分をまもるためや友達に順位をつけるものなの余計がなく、ずっとわたしのなかに入ってきたため、彼らにベストフレンドと言われた時、戸惑いを感じたが本当に嬉しく感じた。

3.3 差別がない

ワークショップで、ハムカ大学の学生がインドネシアのめずらしい仕事を発表した。ごみを集めて業者にもっていく仕事や、雨の日に通行人に傘をさして目的地まで連れていく仕事、路上やレス

トランで歌を歌う仕事などを紹介してくれた。そしてこれらの仕事は経済問題がある人々がやる仕事であるようである。私はこのような仕事は差別されているのではないかと思った。なぜなら日本で、経済問題がある人、例えば野宿者や生活保護受給者に対して差別のまなざしが向けられている現状があるからである。そのため、インドネシアではこれらの職業に対して差別はないと聞いた時も、「なぜ？」とってしまった。

インドネシアでは、たとえ自分と異なる人がいたとしても、その人に対して差別をすることなく、接することができるのである。インドネシアではゴミを集める仕事や傘をさす仕事は、差別どころか、認められている。むしろ他の仕事と同じく、なくてはならない仕事として、敬意をもたれているようにも思えた。

なぜゴミを拾う仕事ひとつをとっても、インドネシアと日本ではこれほど捉え方が違うのだろうか。私たちが「貧しい人は可哀想」と考えるのは、自分自身との差異を確認するため、自分自身の立場を確固たるものとするためであるということが、ひとつの理由としてあると思う。少し、乱暴な言い方をすれば、自分を守るために下をつくり、安心するためである。インドネシアにもこのような考えがないわけではないと思う。しかし、日本に比べてインドネシアは誰かを踏み台にして自分が上に行くような考えはあまりされていないように思う。なぜなら、先ほど上で述べたように「みんな一緒に」という考えがあるからである。その考えをもっている限り、日本のように順位をつけたり競争し合う社会にはならないのではないかと思う。

インドネシアで私が感じた、彼らももつ力について、断片的ではあるが述べてきた。これらの力は、生きていく希望や安心感のようなものだと思う。滞在した期間が短いため、上で述べたことはインドネシアの真実ではないかもしれないし、ほんの一部のことかもしれない。しかし、素の私でいさせてくれる場所、温かく包み込んでくれる人がいることは確かなものである。日本から遠く離れた異国の地に、このような私にとって確かなものが掴めただけでも、今回のプログラムは大変意味のあるものだったと思う。

おわりに

私は10月から、このハムカ大学で日本語を教える。そのことについてインドネシアやハムカを知らない人は、「ひとりで行くなんてすごいねー」「大丈夫なの？」などと声をかけてくれる。しかし、私はハムカで働くことに迷いはなかった。上でも述べてきたことだが、無数のたしかに近しい関係・つながりを感じたからこそ、家族や日本人の知人がいるわけではないインドネシアで働くことも決意できた。また、悪い状況であっても笑い飛ばすことができる頼もしい人びとがたくさんいるから、私も大丈夫だって信じていることができる。そして、自分らしく振舞える場所がインドネシアにはあり、同じく自分らしく素直に生きているベストフレンドがいるから、彼らともっと過ごしたいと思った。

今回のプログラムで経験したことや、これから経験していくことを、自分のなかにどう織り込み、そしてインドネシアの人びとになにをどのように返していけるのか模索しながらインドネシアでの生活を頑張りたいと思う。これからもどうぞよろしくお願いします。

(2015年1月30日受付, 2015年2月4日受理)